



Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2017
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2017. 2018, p. 1-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術

活動報告
2017



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	2
1. 教育プログラムの実施	6
• 大阪大学の取組	6
• 大阪大学 特色ある授業	12
• 京都大学の取組	15
• 京都大学 特色ある授業	19
• 合同講義	21
• 阪大学生の声	26
• 京大学生の声	28
2. プログラム推進委員会の運営	32
• 実施体制	32
• アドバイザー会議	33
• カリキュラムの発展及び拡充	33
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	34
3. 拠点間共同プログラムへの参画	40
• サマーキャンプへの参画	40
• SciREX 交流研究会	45
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	48
• 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会） ...	49
• 共催：学術政策セミナー	68
• その他	71
5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施	74
• 阪大拠点プロジェクト	74
• 京大拠点プロジェクト	77
6. 関西ネットワークの発展	82
• ナレッジキャピタル超学校シリーズ	82
• サイエンスカフェ@千里公民館	88
7. 国際連携の推進	92
• 国際連携	92
• 海外調査及び発表等	92
8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）	96
• 大阪大学	96
• 京都大学	105

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立

案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表 小林傳司(大阪大学)

🍷 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点 (Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere: STiPS)」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012 年 1 月に発足しました。なお、同推進事業には 5 拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

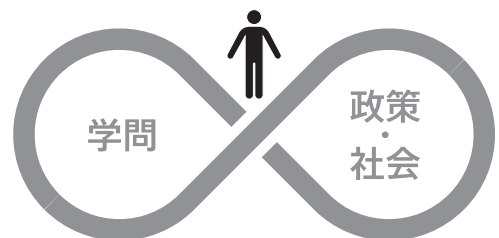
STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与 (public engagement)」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2018年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	理事・副学長	科学哲学、科学技術社会論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	招聘教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データビリティフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
神里 達博	千葉大学国際教養学部	教授	科学史、科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
辻田 俊哉	大阪大学COデザインセンター	講師	国際政治学、国際安全保障論
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任准教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
水町 衣里	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学コミュニケーション論、科学教育
菅原 裕輝	大阪大学COデザインセンター	特任助教	研究倫理、科学哲学
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授	可視化
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
御手洗 潤	京都大学経営管理大学院	教授	都市計画
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
宮川 恒	京都大学大学院農学研究科	教授	農薬化学、天然物化学
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
齊藤 永	京都大学医学部附属病院	准教授	医療情報学
広田 茂	京都大学経済研究所	准教授	経済統計、経済政策
小嶋 大造	京都大学経済研究所	特定准教授	財政政策、農業政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
尾上 洋介	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	情報可視化、数理最適化
井出 和希	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	薬学、疫学、社会医学

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

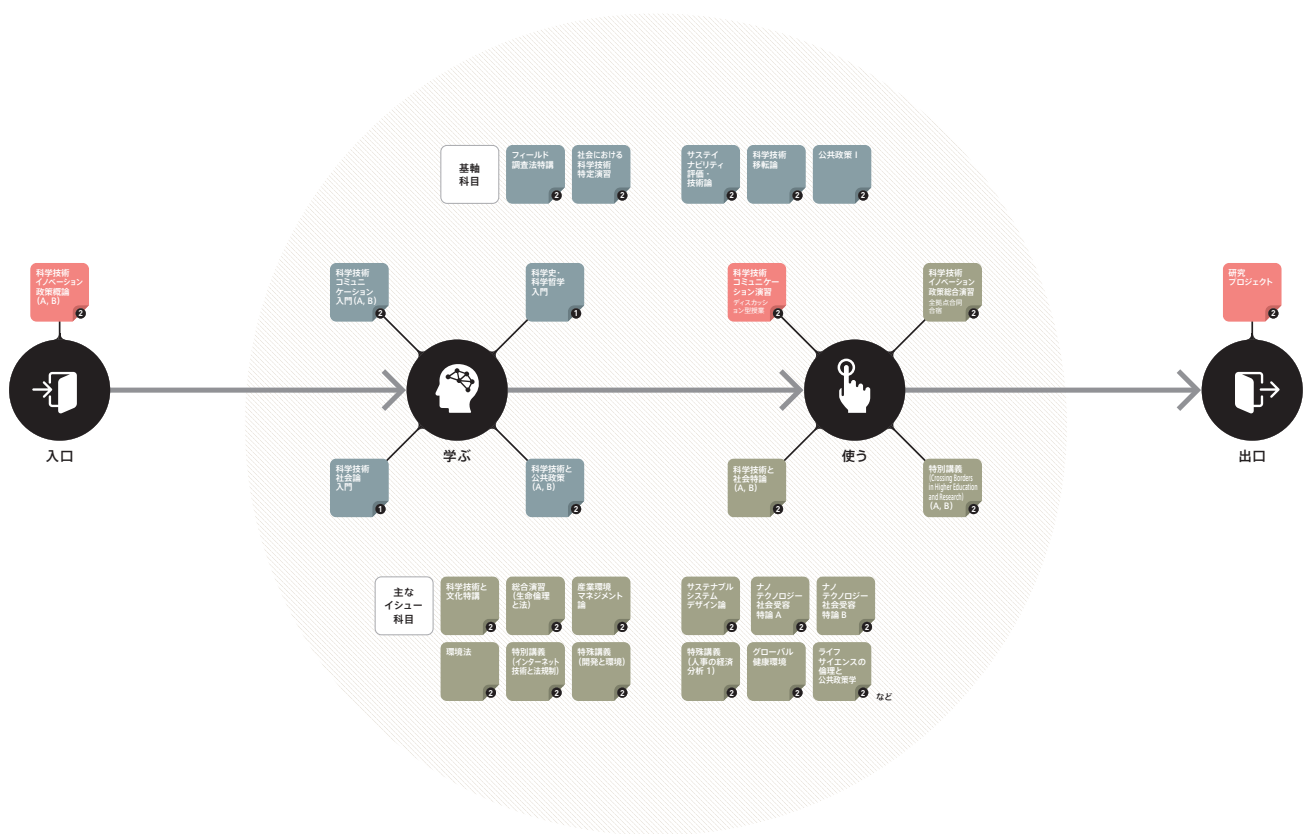


図 副専攻／高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の科目

大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2017 年度 在籍者数の合計：23 人

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

*副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を修得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：5 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：3 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：11 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：3 人、工学研究科：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学へ就職：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学研究科：2 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工研究科学：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学へ就職：2 人、政府・公的研究機関へ就職：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

高度副プログラム（修了要件8単位以上）履修登録者数、修了者数など

2017年度 在籍者数の合計：8人

履修登録者数：7人（所属研究科内訳 理学研究科：2人、医学系研究科：1人、工学研究科：2人、基礎工学研究科：1人、国際公共政策研究科：1人）

修了者数：8人（進路内訳 民間企業：4人、不明：4人）

*高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の8単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013年度

履修登録者数：8人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1人、理学研究科：2人、医学系研究科：3人、国際公共政策研究科：1人、生命機能研究科：1人）

修了者数：0人

2014年度

履修登録者数：12人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1人、理学研究科：1人、工学研究科：4人、基礎工学研究科：3人、国際公共政策研究科：2人、生命機能研究科：1人）

修了者数：3人

2015年度

履修登録者数：10人（所属研究科内訳 文学研究科：1人、理学研究科：2人、医学系研究科：1人、工学研究科：3人、基礎工学研究科：1人、国際公共政策研究科：1人、生命機能研究科：1人）

修了者数：5人

2016年度

履修登録者数：9人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1人、法学研究科：1人、理学研究科：2人、工学研究科：1人、基礎工学研究科：2人、生命機能研究科：1人、情報科学研究科：1人）

修了者数：8人

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2017 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
連携必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年
選択科目Ⅰ： 基軸科目群	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）、秋（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏（豊中）、冬（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習		2	不開講
	工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論	東海 明宏、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	中嶋 啓雄	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Crossing Borders in Higher Education and Research A）	工藤 充	1	秋
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research B）	工藤 充	1	冬
	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特講	森田 敦郎	2	秋～冬
	法学部	特別講義（インターネット技術と法規制）	養老 真一、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A		2	不開講
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤 正	2	集中（春～夏）
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）		2	不開講
	グローバルイニシアティブ・センター（院）	グローバル健康環境		2	不開講
選択科目Ⅱ： イシュー科目群	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏

選択科目Ⅰ：
8単位以上
（選択科目ⅠおよびⅡから、それぞれ2単位以上を履修）

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2017 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	担当教員	単位	学期
必修科目：2単位	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）、秋（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏（豊中）、冬（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習		2	不開講
	工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論	東海 明宏、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	中嶋 啓雄	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Crossing Borders in Higher Education and Research A）	工藤 充	1	秋
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research B）	工藤 充	1	冬
	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特講	森田 敦郎	2	秋～冬
選択科目：6単位以上	法学部	特別講義（インターネット技術と法規制）	養老 真一、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（春～夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A		2	不開講
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤 正	2	集中（夏）
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）		2	不開講
	グローバルイニシアティブ・センター（院）	グローバル健康環境		2	不開講

🌟 大阪大学 特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論 (A, B)」(春・夏学期 隔週水曜 5・6 限)

本科目では、毎回、各界で活躍するフロンランナーをゲストとして招き、科学技術イノベーションが、社会にとってより良いものとして展開していくための諸条件について、講義とディスカッションを通じて立体的に学んでいます。

2017 年度は、以下のような内容で行いました（ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの）。なお、2017 年 7 月 7 日は、連携拠点である京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師でした。

「科学技術イノベーション政策概論 A」

第 1 回（2017 年 4 月 12 日） 小林 傳司（大阪大学 理事・副学長）

社会的合意形成？ ～リスクコミュニケーションの在り方～

第 2・3 回（2017 年 4 月 26 日） 小林 俊哉（九州大学 准教授）

科学技術政策論 - 「社会のための科学」という観点 -

第 4・5 回（2017 年 5 月 10 日） 岸本 充生（大阪大学 教授）

レギュラトリーサイエンス論

第 6・7 回（2017 年 5 月 24 日） 城山 英明（東京大学 教授）

科学技術ガバナンス

第 8 回（2017 年 5 月 31 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

まとめ



「科学技術イノベーション政策概論 B」

第 1 回（2017 年 6 月 14 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

ガイダンス

第 2・3 回（2017 年 6 月 21 日→8 月 10 日*） 青島 矢一（一橋大学 教授）

企業によるイノベーションの促進

第 4 回（2017 年 7 月 7 日） 川上 浩司（京都大学 教授）

健康福祉政策と情報の利活用

第 5 回（2017 年 7 月 7 日） 小山田 耕二（京都大学 教授）

ユニバーサルデザイン論

第 6 回（2017 年 7 月 19 日） 調 麻佐志（東京工業大学 教授）

世界大学ランキングを巡って

第 7 回（2017 年 7 月 19 日） 標葉 隆馬（成城大学 専任講師）

科学技術政策と研究評価

第 8 回（2017 年 7 月 26 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

まとめ



*当初、6 月 21 日に予定されていた講義が悪天候のためキャンセルになりました。予定されていた講義の内容は、8 月 10 日に振り替えて実施しました。

「科学技術と社会特論 (A, B)」(秋・冬学期 隔週水曜 5・6 限)

本科目は、科学技術の進展や社会の状況と、受講生の関心・ニーズを踏まえ、毎年、具体的な科学技術の問題をテーマにした「ホットイシュー科目」です。現代社会における科学技術は、多大な恩恵をもたらすとともに、環境や人間の健康に対するリスクや倫理的問題などをめぐって、しばしば社会的な論争的になります。こうした科学技術をめぐる社会的対立の複雑なあり方を理解することは、科学技術イノベーション政策の立案や研究開発、社会の多様な立場をつなぐコミュニケーション実践を進めるうえで欠かせません。そのために本科目では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題（ホットイシュー）を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生および担当教員の間で討論を行っています。

2017 年度は、以下のような内容で行いました（ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの）。

「科学技術と社会特論 A」

テーマ：東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故による避難者とその賠償をめぐる問題

第 1・2 回（2017 年 10 月 4 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

ガイダンス

第 3・4 回（2017 年 10 月 18 日） 山下 恭範（文部科学省 次長）

福島原発事故における避難・賠償・復興の現状と課題-政府における取組（他人ゴト）と一役人（自分ゴト）の視点から-

第 5・6 回（2017 年 11 月 15 日） 除本 理史（大阪市立大学 教授）

福島原発事故被害者の権利回復

第 7・8 回（2017 年 11 月 22 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

総合討論



「科学技術と社会特論 B」

テーマ：大学におけるデュアルユース（軍民両用）研究の是非をどう考えたらよいか

第 1・2 回（2017 年 11 月 29 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

ガイダンス

第 3・4 回（2017 年 12 月 20 日） 杉山 滋郎（北海道大学 名誉教授）

デュアルユース問題を考える

第 5・6 回（2018 年 1 月 24 日） 西山 淳一（公益財団法人未来工学研究所 研究参与）

防衛技術とデュアルユース

第 7・8 回（2018 年 1 月 31 日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

総合討論



「科学技術コミュニケーション演習」(集中講義(夏))

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。2017年度のテーマは「高レベル放射性廃棄物の地層処分」。「この先、仮に現状の国策通りに進展するとした場合、具体的な地域の選定はどのように進めるべきか(もしくは、というより本質的には、そもそも論として現状の政策にどのような課題がありどう転換すべきか)」でした。

3日間のスケジュールは次の通りで、グループワークを中心に進めました。

1日目

ガイダンス・自己紹介

テーマに関する背景情報の共有(講義)

グループワーク1: 専門家への質問の作成

専門家とのディスカッション



専門家としてお越しいただいたのは、経済産業省関連のワーキンググループ(総合資源エネルギー調査会 電力・ガス事業分科会 原子力小委員会 放射性廃棄物ワーキンググループ)のメンバーでもある、吉田英一氏(名古屋大学 教授)と寿楽浩太氏(東京電機大学 准教授)でした。

2日目

グループワーク2: 前提条件の整理

中間報告

グループワーク3: 議論の焦点を絞る



3日目

グループワーク4: 発表準備

発表

ゲストからの講評

授業レポートは、大阪大学 C0 デザインセンターのウェブサイトにも掲載されています。

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000395.php>

🌟 京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。



図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。



図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」 運営状況

研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上）

2017 年度 在籍者数の合計：17 人

履修者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

* 研究科横断型教育プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

京都大学 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2017 年度）

区分		科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位
			前期	後期		
入門必修科目		現代社会と科学技術		○	川上 浩司（医学研究科）、他	2
必修科目		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
連携必修科目		研究プロジェクト	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
選択科目（8単位以上）	選択科目Ⅰ…基礎科目群（1科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上 浩司（医学研究科）、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
		情報リテラシー基礎Ⅰ	○		小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬政策・行政		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		問題解決思考		○	末松 千尋（経営管理大学院）	2
		疫学Ⅰ（疫学入門）	○		中山 建夫（医学研究科）	2
		公共政策論Ⅰ		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング		○	伊勢田 哲治（文学研究科）	2
	選択科目Ⅱ…イシュー科目群（1科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		京都学のための科学	○		小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		応用経済学		○	依田 高典（経済学研究科）	2
		政策のための研究方法論	○		カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		医療政策の ELSI		○	カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		健康情報学Ⅰ		○	中山 建夫（医学研究科）	2
		文献評価法	○		中山 建夫（医学研究科）	1
		技術者倫理と技術経営	○		榎木 哲夫（工学研究科）、他	2
		医療経済学 A	○		後藤 励（白眉センター）	2
		共生社会環境論演習 3 B		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		まちづくりとまち経営		○	御手洗 潤（経営管理大学院）	2

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術入門」（前期 木曜 1 限）、「現代社会と科学技術」（後期 木曜 2 限）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。2013 年度から 2017 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」では、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起す倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしました。「現代社会と科学技術」では、意思決定と不確実性、データの可視化、ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス、政策としての生命倫理、大学の基礎研究と企業連携、宇宙政策、技術の質の評価、医療技術評価、食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス、幹細胞とイノベーション、科学技術と社会、移植医療などをテーマとしました。

2014 年度からは、レポートには教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。2013 年度はレポートを提出するのみでしたが、積極的な学生が多く自分のレポートに対するコメントを求めていたので、各テーマを担当した教員がレポートに添えて学生にフィードバックするようにしました。

2017 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術入門」

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 第 1 回（2017 年 5 月 11 日） | 小山田 耕二（京都大学 教授） |
| 科学的方法について | |
| 第 2 回（2017 年 5 月 18 日） | 川上 浩司（京都大学 教授） |
| 健康福祉政策と情報の利活用 | |
| 第 3 回（2017 年 5 月 25 日） | 宮野 公樹（京都大学 准教授） |
| 大学における学問とは?分野融合・越境のダイナミクス | |
| 第 4 回（2017 年 6 月 1 日） | カール・ベッカー（京都大学 特任教授） |
| 現代の医療技術が起す倫理問題とその政策 | |
| 第 5 回（2017 年 6 月 8 日） | 中山 建夫（京都大学 教授） |
| 疫学とゲノム科学から社会基盤を考える | |
| 第 6 回（2017 年 6 月 15 日） | カール・ベッカー（京都大学 特任教授） |
| 研究の進め方 | |
| 第 7 回（2017 年 6 月 22 日） | 小嶋 大造（京都大学 特定准教授） |
| 政策形成とエビデンス ―金融政策を事例に― | |
| 第 8 回（2017 年 6 月 29 日） | 田渕 敬一（京都大学 准教授） |
| 社会と科学の関わり方 ―とある研究不正問題を事例に― | |
| 第 9 回（2017 年 7 月 6 日） | 宮野 公樹（京都大学 准教授） |
| 振り返りワークショップ | |
| 第 10 回（2017 年 7 月 13 日） | 全教員 |
| 研究の進捗確認 | |

「現代社会と科学技術」

- 第1回（2017年10月5日） カール・ベッカー（京都大学 特任教授）
政策のための科学：合意形成へ
- 第2回（2017年10月12日） 小山田 耕二（京都大学 教授）
データ可視化と政策立案
- 第3回（2017年10月19日） 佐野 亘（京都大学 教授）
現代民主主義のもとでの政策決定
- 第4回（2017年10月26日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）
トランス・サイエンスと Participatory Technology Assessment
- 第5回（2017年11月2日） 加藤 和人（大阪大学 教授）
ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス
- 第6回（2017年11月9日） 宮川 恒（京都大学 教授）
食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス
- 第7回（2017年11月16日） 全教員
研究の進捗確認
- 第8回（2017年11月30日） 関根 仁博（京都大学 特定准教授）
最先端大型研究施設の整備
- 第9回（2017年12月7日） 依田 高典（京都大学 教授）
「政策のための科学」の計量書誌学データ分析
- 第10回（2017年12月14日） 後藤 励（慶應義塾大学 准教授）
医療費の増加と医療技術評価
- 第11回（2017年12月21日） 富田 直秀（京都大学 教授）
技術の質の評価
- 第12回（2018年1月11日） 伊勢田 哲治（京都大学 准教授）
クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会
- 第13回（2018年1月18日） 末松 千尋（京都大学 教授）
トランザクション・コストと経済政策
- 第14回（2018年1月25日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）
移植医療の社会的価値
- 第15回（2018年2月1日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）
振り返りワークショップ

🍷 合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」(夏期集中)

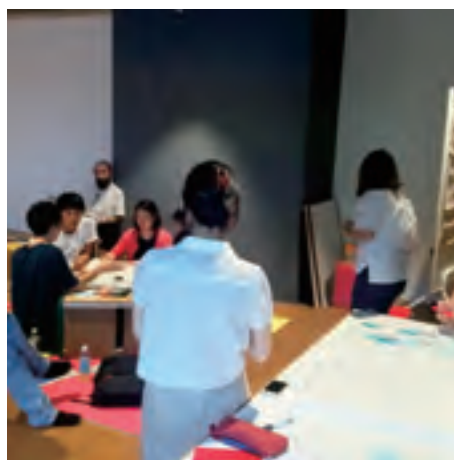
本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つであるサマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしました。この事前ワークショップは、京都大学と一緒に実施しています。

2017年度は、8月9日に事前ワークショップを大阪大学・京都大学合同で行いました。2016年度に引き続き、事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田直樹さんと岩田花奈さんをお願いをしました。サマーキャンプ本番で、よりよい対話ができるようになること、また、多様な視点、多層的な課題の捉え方ができるようになることを目指して行なっている事前ワークショップ。対話の場で話し合いの環境を整える力、その場を読み解く力を向上させることをねらったプログラムを実施しました。

午前中は、主に丁寧なチーム作りを行いました。まずは、チームで相談をして、話しやすい空間づくり。そして、自己紹介ツールを使ったチーム内の自己紹介を行いました。



午後は、議論の組み立て方を学ぶ時間。「議論チーム」と「観察チーム」に分かれ、交互に議論と観察を行って、議論の流れを俯瞰するという体験をしました。



その後、8月20日からのサマーキャンプに参加しました。8月20日から22日にかけてのサマーキャンプは、政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは学生5人と教職員5人が、京都大学からは学生6人と教職員3人が参加しました。



サマーキャンプのプログラムに関しては、「拠点間共同プログラムへの参画（本冊子 39 ページ以降）」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」(通年)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2017年度の合同発表会は、2017年12月9日に京都大学楽友会館にて、大阪大学5人と京都大学6人の合計11人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2017年度 (口頭発表会：2017年12月9日 京都大学楽友会館にて)

大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 ―文献調査とインタビュー調査による探索的研究―
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 ―因果関係の判定条件と規範的・価値的含意―
- (4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 ―現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて―
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 ―サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について―



京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 ―韓国の全国紙の社説を中心に―
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 ―大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討―
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 ―福島第一原子力発電所事故を例に―
- (4) 地域公共交通改革の事例分析 ―地域の持続的な移動手段確保に向けて―
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究 ―健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る―

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013 年度 （口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム ―「翻訳」、「批判」から「構築」へ―

2014 年度 （口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 ―エネルギーを中心として―
- (2) 科学技術とフィクション ―人工子宮の現実化に寄せて―
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 ―先行研究を参考に学生側の視点を探る―
- (4) 環境ラベルに関する一考察 ―NL マークを事例にあげて―
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 ―福島市の事例をもとに―
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 ―習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化―
- (7) 科学のイメージと PR ―企業広告において「科学的である」とはどういうことか―

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 ―社会の理解のために―
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 ―医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて―
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床 ―応用への実現に関する調査研究―
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定 ―選択型実験による接近―
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 ―レセプトデータベースを用いた疫学的研究―

2015 年度 （口頭発表会：2016 年 2 月 13 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望 ―大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として―
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化 ―科学技術社会論と古典的自由主義の融合―
- (3) 日本における核融合研究と政策 ―歴史、現状、そして今後に向けて―
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて ―DNA 型証拠と足利裁判―
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査 ―大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認―

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析 ―大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える―
- (2) 問題解決における現場地の重要性 ―自転車シェア事業を手掛かりに―
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望 ―新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に―
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016 年度 （口頭発表会：2016 年 12 月 10 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 ―若手研究者に対する探索的調査―
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 ―日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて―
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について ―物理分野を中心に―
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 ―ユーザー参加の視点から―
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 ―過去の河川計画を例として―
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 ―偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」―

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策 ―奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に―
- (4) 自治体議員の研修に関する考察 ―評価グリッド法を用いた分析―
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。大阪大学の入門必修科目「科学技術イノベーション政策概論 B」において、京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師を務め、京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、加藤和人教授が講師を務めました。

🌟 阪大学生の声

主専攻と STiPS の間で、良い「相互作用」がありました。

垣本 伊守幹さん（文学研究科 文化形態論専攻 博士前期課程 2 年）

僕はSTiPSをとおして、自分自身が主専攻で取り組んでいる「科学と社会」というテーマについて、実際に理系で研究に取り組んでいる人たちに自分の意見をぶつけてみたいと考えていました。「研究プロジェクト」では、自分の取り組んでいるテーマを発表し、フィードバックをもらう場が定期的に設定されています。僕の所属は文学研究科なので、理系の人から直接意見をもらう機会はとても貴重でした。予想以上にお互いの共通の言語で話すということが難しい、と感じ、表現に工夫をするなど、試行錯誤を通じてコミュニケーションスキルが磨かれたと思います。また「研究プロジェクト」は個別指導なので、先生方にきめ細かくアドバイスをもらうこともできました。スケジュール管理の面でも、主専攻とのバランスを見ながらケアをしてもらえ、安心感につながりました。



STiPS のメンバーと読書会を企画したことも印象に残っています。STiPS 自体がやりがいのあるプログラムですが、そこに集まってきている学生は、「こんなことをやってみたい」と投げかけてみたらポジティブな反応が返ってくるような、知的好奇心にあふれた人たちだと思います。

STiPS の教員に個別相談し、履修に関する不安はなくなりました。

三原 明穂さん（医学系研究科 保健学専攻 博士前期課程 1 年）

履修を検討しはじめた頃、副専攻はとても忙しいという噂を聞き、主専攻とバランスをとるのは難しいのでは、と心配していました。でも、STiPS の先生に履修相談をすると、私の状況をふまえて具体的なアドバイスをして下さいました。一番勇気付けられたのは、「STiPS は『科学技術と社会をつなぐ』ということがテーマで、理系の人こそ積極的にとってほしい」と先生がおっしゃったことです。STiPS には博士課程の人だけでなく私と同じ修士課程の先輩がいることも安心材料になりました。



STiPS の授業で、大学内外の専門家の方々や、他大学の学生など、さまざまなバックグラウンドを持つ人とディスカッションする経験をとおして、自分自身の興味関心の幅が広がったと実感しています。STiPS を受講する前に比べ、普段自分が触れている情報を、より「自分のこと」として捉えられるようになりました。また、主専攻に対する自分自身の視点の置き方が変化してきているようにも感じています。将来についてはまだ検討中ですが、もし医療関係の仕事に就くとしても、自分自身が医療者である前に市民であるということを意識して仕事をしていくことができれば、と考えるようになりました。

STiPSによって、自分自身の「問題意識」が明確になりました。

吉田 篤さん（理学研究科 生物科学専攻 博士前期課程1年）

STiPSを受講するまでは、どちらかというと専門性を磨くことに重点を置いて学んでいましたが、一方で「このままでいいのかな」という気持ちも持っていました。もともと僕は、理系の学部に所属しながら文系のことも学びたいとずっと考えていたのです。しかし、研究というレベルとなるとさすがに個人の力では難しい、と感じていました。STiPSで新しい刺激を得ることは自分自身の「このままでいいのかな」という気持ちを解消する良い機会になるかもしれない、と思いました。



授業では「科学技術イノベーション政策概論」が興味深かったです。大学の内外問わずさまざまな分野の専門家がゲスト講師として来られるリレー講義で、幅広い問題を俯瞰できる視野を開いてもらえました。また、「特別講義：Crossing Borders in Higher Education and Research」は、留学生も多く参加しており、グローバルな視点でディスカッションできたことが非常に良い経験になりました。

今は、自分なりに何が問題なのかがはっきりしてきた、という感覚があります。さらにどのように解決策を立案していくか、ということをやより深く考えたいと思うようになっていきます。

🍁 京大学生の声

科学の立ち位置を考える

井口 智博さん（人間・環境学研究科 共生人間学専攻 修士課程1年）

僕がSTiPSのプログラムに志願した理由は、目覚ましい進歩を遂げ続ける科学技術と、アップデートの追いつかない制度や社会通念との間にある溝は如何にして埋まりうるのか、という問題について考える上で有益ではないかと考えたからでした。

このプログラムを受講するなかで、さまざまなことに気づかされます。たとえば、科学とひとことで表わされるものも、分野によって異なる作法や論理があるということ。科学・科学者集団が社会に対してどのような場所に位置しているのか、そして位置すべきなのかについての認識もまた、分野によって異なるということ。あるいは、科学研究と政策（それが科学的な知見に基づくとしても！）のあいだには決定的な違いがあるということ。

ユニットのさまざまなメンバーと科学に関する議論をする機会、互いの視座の違いに驚き合う機会には得難いものであり、それを提供してくれるこのプログラムは有益だと思います。そして同時に、STiPS自体が、科学と社会とを架橋するための模索の途上にある取り組みなのだと感じています。だからこそ、このプログラムは、社会における科学の立ち位置を考えるのに適した環境だと考えています。



新たな自分が育まれる機会

増澤 祐子さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 博士後期課程1年）

他分野の学生とともに、「科学的根拠に基づいて政策を可視化する」ために必要な科学的根拠とは何かを学びたいと思い、このプログラムへの参加を希望しました。

実際にプログラムでの学びを通じて、大学、研究科を超えた様々な専門性を持った先生方や学生とのディスカッションはとても新鮮で、多角的な視点で考えるトレーニングとなりました。実際に政策に携わっている方々から政策やそのプロセスをうかがえる貴重な機会も多く、授業やサマーキャンプを通じて多くの学びを得たと感じています。他分野の方々とのディスカッションで、様々なトピックについての自身の考えを深められるというのも、このプログラムの魅力でした。知見を広げ、共に問題解決を目指す過程を経ることで、多職種や他機関同士で政策を実施する上で、協働し、どう課題解決を目指すべきかを考える機会を経験することができたと感じています。このプログラムを通じて出会うことのできた方々とのつながりは、将来とても貴重なものとなり、研究や政策に関わる機会に恵まれた際には、大いに役立つものとなると思います。ここで得た学びを余すことなく自身の力とし、将来のキャリアパスへ活かしたいと思っています。



人生、二毛作・三毛作

西尾 翔貴さん（医学研究科 医科学専攻 修士課程1年）

私がこのプログラムに参加したのは、「つなぐ人材」という言葉に魅かれたからです。私の主専攻は分子生物学（免疫学）で、普段から細胞を用いた基礎研究に勤しんでいるのですが、それだとどうしても、自分の専門の外側の世界を知る機会が少なく、これでは視野を狭くしてしまうのでは、と考えました。これからの社会は、ますます複雑性が増し、また各学問の領域は肥大化し、それらの境界は曖昧になっていきます。そうしたなかで、自分の専門以外の領域を知っておくことが重要になることは間違いないでしょう。

このプログラムでは、さまざまな分野の先生方の講義を聞くことができ、さらに、他（多）分野の学生らと議論する機会が与えられています。ある問題に対して、分野が違えば、捉え方やアプローチの仕方がここまで違うのかと、非常に驚くことが多いです。同時に、そうした多様性を受け入れ、少しでも自分のものにしていくことで、自分の考え方や視野が少しずつ広がっていると確実に実感しています。



2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。

阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2017 年度は 7 月 5 日、8 月 20 日、12 月 9 日の計 3 回実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。



各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主に CO デザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。アドバイザー・メンバーは下記の4名です。

- ・鈴木 寛 文部科学大臣補佐官、東京大学公共政策大学院教授・慶應義塾大学政策メディア研究科兼総合政策学部・教授
- ・古川 俊治 自民党参議院議員、医学博士、弁護士、慶應義塾大学・教授
- ・鷲田 清一 京都市立芸術大学理事長・学長
(アドバイザー会議設置当時は、大谷大学文学部・教授、前大阪大学総長)
- ・三木 孝 神戸市保健福祉局長

カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新設科目数は9となりました。2015年度の開講科目数は29、2016年度の開講科目数は32でした。2017年度には、4学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は36になりました。京都大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は22、うち新設科目数は5でしたが、2014年度の開講科目数は1科目追加し23科目となり、2015年度の開講科目数は23、2016年度の開講科目数は25、2017年度の開講科目数は23でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件14単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013年3月27日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

🍷 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)			
【第 25 回 STiPS Handai 研究会】 メディア・ジャーナリズム研究と科学技術コミュニケーション	2017 年 5 月 16 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 A」の一環として 開催。
【第 26 回 STiPS Handai 研究会】 職業としてのサイエンスコミュニケーション — 「研究所」の研究広報—	2017 年 5 月 16 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 27 回 STiPS Handai 研究会】 「高校」というフィールドでの科学教育	2017 年 6 月 27 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 28 回 STiPS Handai 研究会】 科学医療部記者の働き方	2017 年 7 月 4 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 29 回 STiPS Handai 研究会】 国家公務員からみた「科学技術と社会の関係」	2017 年 7 月 11 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。

【第 30 回 STiPS Handai 研究会】 科学コミュニケーターは職業にできるのか？	2017 年 7 月 18 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 31 回 STiPS Handai 研究会】 企業によるイノベーションの促進	2017 年 8 月 10 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS
【第 32 回 STiPS Handai 研究会】 自然史博物館が創りだす新しいコミュニケーションのかたち	2017 年 12 月 5 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟 1 階 交流 サロン	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 33 回 STiPS Handai 研究会】 宇宙開発プロジェクトとコミュニケーション	2017 年 12 月 12 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟 1 階 交流 サロン	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 34 回 STiPS Handai 研究会】 科学と社会の＜間＞に立つメディア論	2017 年 12 月 19 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟 1 階 交流 サロン	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 35 回 STiPS Handai 研究会】 ” 市民による市民のための科学” の成立と展開— コミュニケーションの視点から	2018 年 1 月 9 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟 1 階 交流 サロン	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 36 回 STiPS Handai 研究会】 3. 11 後の原子力政策	2018 年 1 月 11 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 C	主催：STiPS * 授業「科学技術と 公共政策 B」の一環 として開催。

【第 37 回 STiPS Handai 研究会】 科学技術「反省」白書にこめた思い	2018 年 1 月 16 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟1階 交流 サロン	主催：STiPS * 授業「科学技術コ ミュニケーション入 門 B」の一環として 開催。
【第 38 回 STiPS Handai 研究会】 日本の科学技術イノベーション政策の現状	2018 年 1 月 25 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ2 階 セミナー 室 C	主催：STiPS * 授業「科学技術と 公共政策 B」の一環 として開催。
ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル			
【対話で創るこれからの「大学」第 1 回】 価値をわたしたちのものにする	2017 年 8 月 2 日	ナレッジキャ ピタル、カフ ェラボ（グラ ンフロント大 阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタ ル、株式会社 KMO、 大阪大学 C0 デザイ ンセンター 共催：STiPS
【対話で創るこれからの「大学」第 2 回】 あたりまえを疑って本質に迫る	2017 年 8 月 30 日	ナレッジキャ ピタル、カフ ェラボ（グラ ンフロント大 阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタ ル、株式会社 KMO、 大阪大学 C0 デザイ ンセンター 共催：STiPS
【対話で創るこれからの「大学」第 3 回】 「視座」を変えてみえる世界	2017 年 10 月 5 日	ナレッジキャ ピタル、カフ ェラボ（グラ ンフロント大 阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタ ル、株式会社 KMO、 大阪大学 C0 デザイ ンセンター 共催：STiPS

学術政策セミナー ―大学のこれからを考える―			
【第7回学術政策セミナー】 社会から共感を得る大学となるために	2017 年 7 月 11 日	大阪大学サイバーメディア コモンズ（サイバーメディア センター本館 1 階）	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA プロ ジェクト 共催：STiPS
【第8回学術政策セミナー】 研究を支える多様な仕掛け	2017 年 10 月 26 日	大阪大学サイバーメディア コモンズ（サイバーメディア センター本館 1 階）	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA 部 門 共催：STiPS
【第9回学術政策セミナー】 役に立つ大学とはどういうことか？	2018 年 3 月 14 日	大阪大学テクノアライア ンス棟1階 アライアンスホ ール	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA プロ ジェクト 共催：STiPS
サイエンスカフェ@千里公民館			
サイエンスカフェ@千里公民館「一歩先の未来を みんなで考える：新しいテクノロジーとの付き合 い方」	2017 年 9 月 5 日	千里公民館 第3講座室	主催：豊中市立千里 公民館 共催：STiPS
サイエンスカフェ@千里公民館「新しいテクノロ ジーのルールをつくる：安全と安心はどう確保さ れているのか」	2017 年 10 月 3 日	千里公民館 第3講座室	主催：豊中市立千里 公民館 共催：STiPS
サイエンスカフェ@千里公民館「本当に効く？ サプリメント：あなたに効いたら、わたしにも効 く？」	2017 年 12 月 12 日	千里公民館 第1講座室	主催：豊中市立千里 公民館 共催：STiPS
拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）阪大拠点の一環として開催			
政策立案ワークショップ（宇宙）第1回	2017 年 7 月 14 日	エキスパート 倶楽部（東京 都千代田区）	主催：STiPS
政策立案ワークショップ（宇宙）第2回	2017 年 7 月 28 日	霞が関ナレツ ジスクエア スタジオ（東 京都千代田 区）	主催：STiPS

政策立案ワークショップ（宇宙）研究評価会	2017 年 9 月 8 日	エキスパート 倶楽部（東京 都千代田区）	主催：STiPS
ワークショップ「宇宙政策の未来についてみんなで考える」	2018 年 1 月 27 日	福岡市科学館 交流室 1	主催：STiPS 共催：九州大学科学 技術イノベーション 政策教育研究センタ ー、福岡市科学館
その他			
C0 デザインカフェ 第 2 回「超スマート社会に潜むワナ？」	2017 年 6 月 12 日	大阪大学全学 教育総合棟 I (3 階) 341 号 室	主催：大阪大学 C0 デザインセンター プログラム提供：副 専攻プログラム/高 度副プログラム「公 共圏における科学技 術政策」
C0 デザインセンター 共創イノベーションセミナーシリーズ「大学における科学コミュニケーション教育と高度汎用力」	2017 年 11 月 20 日	大阪大学全学 教育推進機構 サイエンスコ モンズ サイ エンス・スタ ジオ A	主催：大阪大学 C0 デザインセンター 共催：STiPS

3. 拠点間共同プログラムへの参画

3. 拠点間共同プログラムへの参画

サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2017 年度

実施日：2017 年 8 月 20 日～22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013 年度

実施日：2013 年 8 月 23 日～25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度

実施日：2014 年 8 月 31 日～9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度

実施日：2015 年 8 月 21 日～23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度

実施日：2016 年 9 月 15 日～17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

2017 年度の体制

主催：SciREX 基盤的研究・人材育成拠点

幹事校：政策研究大学院大学

2017 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「2030 年のシナリオ：異分野連携の科学技術イノベーション政策」

2017 年度 SciREX サマーキャンプは、2030 年に向けた将来ビジョンとその達成のためのデザインをどのように描き、そのもとでエビデンスに基づいた具体的政策がいかにつくられていくべきなのか、実践的に学ぶ機会を提供する。

東京オリンピックを迎える 2020 年はターゲット・イヤーであるとともに、一つの通過点である。オリンピック後に残すべきレガシーは何かについて議論が行われ、東京オリンピック（とその後）に向けた戦略のもと、省庁・業界横断的な取り組みがすすめられている。そこで求められているのは、将来のありべき姿を共有し、それに向けた政策をエビデンスに基づき設計し、実践していくことである。

サマーキャンプでは、2020 年を一つの通過点として意識しながら、2030 年の将来ビジョンについて議論することで、複数のシナリオを持ち、長期的かつ大局的視点により政策を考えることの重要性を学ぶ。その上で、イシュー別または手法演習型のグループワークを行なう。グループワークでは、多様なバックグラウンドを持った参加者が協働して政策課題を発見し、エビデンスに基づき具体的かつ新規の政策提言にとりまとめること、さらに、それらを政策担当者・実務家に向けて提案する過程を経験する。



学習のねらい（プログラムより）

- ・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築する。
- ・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学ぶ。
- ・複数の将来ビジョン・シナリオを共有した上で、テーマごとに、政策担当者や実務家へのヒアリング等を行ない、エビデンスに基づいた具体的な新規政策プランの作成を実践的に行なう。

サマーキャンプのプログラム

	8 月 20 日 (日)	8 月 21 日 (月)	8 月 22 日 (火)
午前		<p>朝食</p> <p>9:00 集合</p> <p>9:00-14:00 グループワーク 2 : グループごとにサイトビジット等</p>	<p>朝食</p> <p>9:00 集合</p> <p>9:00-10:00 グループワーク 5 : 最終発表会に向けての準備</p> <p>10:00-13:30 最終発表会</p>
午後	<p>-13:00 移動・受付</p> <p>13:00-13:15 開会式</p> <p>開会挨拶 : 有本 建男 (政策研究大学院大学 教授)</p> <p>13:15-14:00 オリエンテーション SciREX 事業紹介 : 中澤 恵太 (文部科学省科学技術・学術政策局企画評価課政策科学推進室 室長)</p> <p>参加者紹介 全体説明等</p> <p>14:00-16:30 基調講演 : 玉城 絵美 (早稲田大学 准教授)</p> <p>パネルディスカッション</p> <p>16:30-17:00 休憩</p> <p>17:00-18:30 グループワーク 1</p> <p>18:30-20:30 懇親会 ポスターセッション</p> <p>20:30- 自由時間</p>	<p>14:00-16:30 グループワーク 3 : 中間発表の準備 (この間、別室で、教職員会合を実施)</p> <p>16:30-18:30 中間発表会</p> <p>18:30-20:00 夕食</p> <p>20:00-21:30 グループワーク 4</p> <p>21:30- 自由時間</p>	<p>13:30-13:45 休憩</p> <p>13:45-14:30 閉会式、表彰 総合講評、閉会挨拶 : 黒田 昌裕 (慶應義塾大学 名誉教授、文部科学省「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』」アドバイザー委員会主査)</p> <p>14:30 解散</p>

グループワーク（プログラムより）

A. 科学技術の担い手をどのように育成していくか

①グローバル人材育成に向けた省庁連携のあり方の探索

主担当：吉岡（小林） 徹（東京大学/一橋大学）

副担当：工藤 充（大阪大学）、松尾 真紀子（東京大学）

サポート：井上 敦（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：文部科学省高等教育局学生・留学生課、経済産業省技術環境局大学連携推進室

②科学技術イノベーション人材を育てる政策と大学のあり方

主担当：福井 文威（GRIPS）、五十川 大也（東京大学）

副担当：吉岡（小林） 徹（東京大学）

サポート：井上 敦（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課、大臣官房政策課評価室・対話型政策形成室、その他関連行政機関

B. 科学技術による社会変化とどのように向き合うか

①AI の社会実装現場における倫理的・法的・社会的課題（ELSI）の検討

主担当：菅原 裕輝（大阪大学）

サポート：中川 尚志（JST-CRDS）、岡村 麻子（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：国立研究開発法人理化学研究所革新知能統合研究センター（AIP）

C. 持続可能な都市をどのようにデザインするか

①防災・減災科学技術によるレジリエントな社会の構築

主担当：尾上 洋介（京都大学）

副担当：黄 俊揚（GRIPS）

サポート：林 信濃（JST-CRDS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：構造計画研究所、馬場 健司（東京都市大学 環境学部 教授）、土井 章（日本防災プラットフォーム 事務局長）

②2030 年のスマートシティと科学技術の役割

主担当：諸賀 加奈（九州大学）

サポート：高橋 恒平、鈴木 和泉（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：柏の葉スマートシティ、柏の葉アーバンデザインセンター、堀 裕典（一般財団法人森記念財団都市整備研究所）、坂齊 豊（UDCK 環境未来都市担当/柏市企画部企画調整課）、大塚 恵理香（三井不動産株式会社柏の葉街づくり推進部事業グループ）

D. 科学技術による健康・医療の質の向上の方策とは

①技術革新と「医療」の変容（データドリブン医療）

主担当：森川 想（東京大学、SciREX センター）、黒河 昭雄（JST-RISTEX）

副担当：隅藏 康一（GRIPS）、井出 和希（京都大学）

サポート：金貝（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア推進本部室、内閣官房健康・医療戦略室、経済産業省ヘルスケア産業課

E. これからのメディア、公共のあり方とは

①2030 年のテレビ界

主担当：谷口 諒（一橋大学）

副担当：木村 めぐみ（一橋大学）

サポート：小山田 和仁（JST-CRDS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：藤岡 伸夫（株式会社テレビ朝日 営業局マーケティング担当局長）、総務省情報流通行政局放送政策課

F. シナリオプランニングの理論と技法

主担当：角和 昌浩（東京大学）

サポート：岡村 麻子（GRIPS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：大和 則夫（一般財団法人森記念財団 都市戦略研究所 研究員）、白川 展之（NISTEP 科学技術予測センター 主任研究官）

G. データで解析する科学技術イノベーション - 「覗いて」、「繋いで」、見える『現在』と『未来』 -

主担当：原 泰史（GRIPS）

副担当：池内 健太（GRIPS/RIETI）、小柴 等（NISTEP）

サポート：原田 裕明（JST-CRDS）

想定訪問先及びゲスト・スピーカー：斎藤 尚樹（NISTEP 総務研究官）、森川 正之（RIETI 副所長）

SciREX 交流研究会

SciREX 交流研究会は、「科学技術イノベーション政策のための科学 (SciREX)」コミュニティの発展を目指して立ち上がった研究会です。第 6 回は 2017 年 9 月 29 日に、東京大学において実施され、平川秀幸教授が講演を行いました。

第 6 回 SciREX 交流研究会

- タイトル：科学技術とデモクラシー
- 講演者：平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- 日時：2017 年 9 月 29 日（金）18:30～20:00
- 場所：東京大学本郷キャンパス 国際学術総合研究棟（新棟）12F 1213A 演習室 A
- 主催：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）、政策研究大学院大学

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、本拠点の参画教員が中心となり、ELSI や公共的関与に関する研究成果を学術論文や学会報告などを通じて多数発表してきました。2017 年度の参画教員別の研究業績の詳細については、「8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）」を参照ください。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2017 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。また、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを昨年度に引き続き実施しました。「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）、学術政策セミナーにつきましては本章を、ナレッジキャピタル超学校シリーズなどにつきましては、「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

🌟 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

学際的教育が有効に機能するために、授業を担当する教員が、他の教員の教えている内容を知ることが有益です。しかし実際には、学生は様々な参画教員の授業を受け、異なる領域の知見に触れることができませんが、参画教員同士がそうした経験をする場は限られています。このSTiPS Handai 研究会は、学内外の研究者や実務家を招き、学生だけでなく教員が相互に学び合うことを目的とした、少人数の議論を中心とした研究会です。これをきっかけに学内を中心に協力教員の輪を拡充するとともに、相互理解を深めていくことが期待されます。2017年度は14回実施しました。

第25回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：メディア・ジャーナリズム研究と科学技術コミュニケーション
- ゲスト：田中 幹人（早稲田大学大学院 政治学研究科 ジャーナリズム・コース 准教授）
- 日時：2017年5月16日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ2階 セミナー室A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017年5月16日（火）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ2階セミナー室Aにて、第25回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「メディア・ジャーナリズム研究と科学技術コミュニケーション」を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 A」の一環として開催）。今回は、早稲田大学大学院 政治学研究科 ジャーナリズム・コースの田中幹人さんをお招きしました。この研究会には、授業の受講生10人に加えて、他大学の学生や研究者、普段科学や医療、大学関連の取材をされている新聞記者さんなど計20人（うち、大阪大学教職員5人）が参加しました。



今日のお話はこんな問いかけから始まりました。「みなさん、こう思っていないですか？『質の良い科学報道が身の回りに多くあれば、科学に対する人々の理解や興味関心は上がる。』『科学報道の質の向上のためには、ジャーナリストが科学に対する素養を持てば良い。』『科学者もまた、わかりやすい言葉で情報を発信できるようになれば良い。』でも、これは本当なのでしょうか？」

部分的には正しいこともあるかもしれないけれど、必ずしも正しいとはいえないこれらの“神話”を解体すべく、そこからは、ジャーナリズムのルーツ、ジャーナリズムの原則、科学の規範、科学レポーターと科学ジャーナリズムの違い、新聞記事が世に出るまでのプロセス、リスクの相場観を伝えることの難しさ、サイエンス・メディア・センター（SMC）の活動、分断化していく世界の議論、といった観点が紹介されました。盛りだくさんな90分でした。

参加者からは、「メディアが求めるものと科学者側の伝えるものがズレてることが良く分かった。」「自分の専門外のことで、普段身近なメディアにどのような性質があるのか、自身の専攻とどう関係があるのか知れてよかったです。」「情報量が多く、充実した授業でした。自分の中で今日得た情報をゆっくり整理したいと思います。」というコメントが寄せられました。

第 26 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：職業としてのサイエンスコミュニケーション —「研究所」の研究広報—
- ゲスト：山岸 敦（理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター チーフ・サイエンスコミュニケーター）
- 日時：2017 年 6 月 20 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 6 月 20 日（火）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階セミナー室 A にて、第 26 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「職業としてのサイエンスコミュニケーション —「研究所」の研究広報—」を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。

今回は、理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センターの山岸敦さんを講師としてお招きしました。この研究会には、いつも授業に参加をしている学生さんなど 6 人に加えて、外部の方、大阪大学教職員など計 13 人が参加しました。



まずは 50 分程度、山岸さんから自己紹介&お仕事紹介をしていただき、その後、ちょっと長めの質疑応答の時間としました。お話の内容の一部をご紹介しますと・・・

- ・山岸さんは、自身の仕事を大きく「Communication」と「Production」に分類しているそうです。「Communication」は、メディアでの発信や市民との交流の場を設計すること。そして、「Production」というのは、広報ツールの制作をすることです。
- ・日々の仕事時間の半分ぐらいは、プレスリリースの作成に関することだそうです。山岸さんが所属されているセンターからは、とても多様な分野（工学分野、生命科学分野、有機化学分野など）の論文が発表されているのですが、これら全ての原著論文を読み、プレスリリースの作成に関わっていらっしゃるのだそうです。
- ・JT 生命誌研究館（BRH）にお勤めの頃から関わってきた「Science Communication & Production」という考え方についてもご紹介いただきました。研究者にも非専門家にも魅力的なモノをつくることを目指していきたいということ。そのためには、研究者と表現のプロとの間にたって、研究者の頭の中にあるものを丁寧にすくい取って表現者に伝えることが必要であるということなどを、お話ししていただきました。

参加者からは、「職業としての研究機関広報の役割や目的が非常にわかりやすかった。」「コミュニケーターが組織に所属するか、フリーであるかによって、やれることや目指すものが違うことは発見だった。」「非専門家を対象としたイベントで、副次的に研究者同士の交流が上手くいくという（「ゲノムひろば」の）例が非常に興味深い。」などのコメントが寄せられました。

第 27 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：「高校」というフィールドでの科学教育
- ゲスト：進藤 明彦（神戸大学アドミッションセンター 特命准教授）
- 日時：2017 年 6 月 27 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 6 月 27 日（火）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントcommons 2 階セミナー室 A にて、第 27 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）『「高校」というフィールドでの科学教育』を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今回は、神戸大学の進藤明彦さんを講師としてお招きしました。この日の研究会には、11 人（うち、大阪大学教職員 3 人）が参加しました。



2016 年 3 月までは高校の生物教員だった進藤さんは、今は神戸大学で A0 入試の開発に関わるお仕事をされています。今後は、A0 入試を通じて大学に入る学生さんの入学前教育の開発も進めるのだそうです。職場をがらっと変えたその訳は、「日本の入試を変えたかったから。そして、入試を変えることを通じて、高校教育を変えたかったから。」だそうです。

高校の生物教員時代も、多様な活動をされていました。そのうちの 1 つが、「高校生オススメ全国科学館・博物館ガイド」作成プロジェクト。全国のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校に呼びかけて行ったもので、博物館利用が少ない中学生や高校生に向けたガイドブックを、高校生視点で作成してみよう！というプロジェクトでした。まずは全国から日本科学未来館に集合して事前研修を行い、その後は各学校に戻って地元の科学館や博物館を取材し、そして、各校 4 ページ分のガイドを作成して、最後はみんなで再び集まって発表会。高校生の科学コミュニケーション能力の向上、高校と博物館との連携促進を目指したこのプロジェクトの成果物は、WEB 上に掲載され、誰でもダウンロードできるようになっています。

JST 理科教育支援センターでお仕事をされていた時期もあったそうです。この時には、理科才能教育に関する提言をまとめて報告書を出したり、全国の学校の先生を対象にした実態調査を行ったりしていました。

こんなにアクティブな高校教員になったきっかけは、勤務校で課題研究の指導を始めたこと、だそうです。いろいろな情報を集める中で、海外の中高生対象の研究発表会（規模も大きいし、カッコいい！）を見て衝撃を受けたり、現状の日本の高校の現場が抱える課題を認識したり、大学入試制度の弊害を感じたりする中で、既存の枠から少しずつはみ出る活動もするようになったのだそうです。

参加者を交えたディスカッションの時間では、「高校生が課題研究に取り組むには、本当は研究スキルのようなものを順番に伝えていかないといけないのだけれど、それがなかなか難しい」ということについて、また、「海外の科学研究発表会が日本よりもだいぶ盛り上がっているのはなぜだ？」ということについて、盛り上がりました。

第 28 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：科学医療部記者の働き方

○ゲスト：小坪 遊（朝日新聞科学医療部 記者）

○日時：2017 年 7 月 4 日（火）16:20～17:50

○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A

○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 7 月 4 日（火）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階セミナー室 A にて、第 28 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「科学医療部記者の働き方」を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の研究会には、学生 3 人と大阪大学教職員 5 人、計 8 人が参加しました。台風の影響でお天気が悪く、いつもよりも参加人数が少なくなりました。

ダニやアリの研究をしていた学生時代から朝日新聞科学医療部に至るまでの経緯を楽しく紹介していただきました。医療系の取材を 1 年半担当した後、2011 年 9 月からは地震防災の担当へ。そして、2013 年から 2 年間は福島県でお仕事をされていました。2015 年からは東京に戻って、環境分野を担当されています。この日の数日前は、アラスカで取材をされていたそうです。

新聞記者としての仕事内容を丁寧に紹介していただきました。例えば、取材で「人から話をきく」とときには、次の 3 パターンがあるそうです。1) 研究者にきく、2) 役所、政治家にきく、3) ふつうの人にきく。

1) 研究者にきく：「その科学や技術がどういうメカニズムなのか（例えば、iPS 細胞はどうやってできるのか、除染ってどうやって行われるのか、など）」、「どのような意義があるのか」、「開発秘話はあるのか」ということをきく。

2) 役所、政治家にきく：「政策決定や実施において、どのような科学的知見や技術を使うのか」、「科学的知見があるにもかかわらず、なぜ政策が行われないのか」ということをきく。現状の制度や関連するエビデンスを調べて記事にすることで、制度や政策が動くきっかけになることもある。

3) ふつうの人にきく：「その科学や技術をどう評価しているのか」、「その発見や技術はあなたに何をもたらしますか」、「科学や技術はあなたを幸せにしますか」ということをきく。技術が進めば必ず幸せになるのか、ということも問い直したい。

「読んでもらえる記事を書く」ということを心がけていらっしゃるそうです。そのために、記事にも遊びの要素を入れたりすることも。ただ、テーマによっては、慎重に書かなければならないものもあります（例えば、患者さんの期待をあおりすぎないように、まだ学会発表だけだ、など）。そして、「科学医療部員である前に、記者である」という気持ちも大事にされているそうです。

参加者からは次のような感想が届きました。「科学ジャーナリストという職業が持つ、科学技術の仕組みの理解、より包括的な公共性を見極め、といった使命というものを理解できた。」「“表現の仕方”について記者の方が心がけていること、というのは、今後自分が“受け手”として新聞記事などを読むときはもちろん、自分が“語り手”となる際にも非常に役立つ内容だと感じた。」



第 29 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：国家公務員からみた「科学技術と社会の関係」
- ゲスト：斉藤 卓也（文部科学省研究振興局基礎研究振興課 基礎研究推進室長）
- 日時：2017 年 7 月 11 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 7 月 11 日（火）、文部科学省の斉藤卓也さんをお招きして、第 29 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「国家公務員からみた『科学技術と社会の関係』」を開催しました。この日の会場（大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントcommons 2 階セミナー室 A）には、34 人が集まりました。STiPS の授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の受講者だけではなく、文学部の授業「科学史・科学論講義」の受講者、学外からお越しの方など、多様な方にご参加いただきました。

まずは、斉藤さんが国家公務員としてお仕事をされるときに根本的な問題意識、そして、日本の科学技術の現状についてのお話からです。「自分の子供たちは、自分たちと同じ生活をできるか。日本に生まれてよかったと思えるか。」こんな問いを日々思い浮かべつつ、お仕事をされているそうです。主要国のエネルギー自給率・食料自給率、人口動態、税収といったデータを示しながら、今の日本が置かれている背景を紹介していただきました。その上で、日本の科学技術行政の仕組み、第 5 期科学技術基本計画の概要や、現在日本が目指している「Society 5.0」の概略、そして、現在日本の科学技術行政が抱えている課題の概略をお話いただきました。

日本の科学技術の課題に対応する政策をつくるにあたり、行政はどのように社会の将来像を描けばいいのか。未来の社会像をあるべき姿を描いた上で今すべきことを考える、というバックキャスト型の政策形成のあり方についてのお話もありました。またそれと関連して、文部科学省の中に設置された「対話型政策形成室」の紹介もしていただきました。

後半は質疑応答の時間。多様な角度からの質問が飛び出しました。例えば、「お話を聞きながら、研究者ではない（文系の）私の役割ってなんだろう？ということを考えていました。」というもの。斉藤さんは、「科学技術政策を進める上でも、法律や経済といったいわゆる文系の人になじみの深い社会の仕組みと一緒に考えていくことが大事。実際に、金融関係の人とサイエンスの人が一緒に勉強会をしていたりもするんですよ。」と、文理の壁を超えて科学技術政策に取り組む事例について紹介されていました。

終了後に学生さんたちが書いてくれた感想には、こんな言葉が並んでいました。「一人一人が技術をただ受け取るだけではなく、先と一緒に考えることは私たちの義務なのではないか、と考えました。」「1 つの問題についてもいろいろな角度からのアプローチが必要で、どこかを変えればなんとかなる話ではないのだということを強く感じました。」「産学連携の話題が興味深かった。産学官で議論できるような場を増やしていくとともに社会全体の意識も変えていく必要があるのだろうが、なかなか難しそうだなとも感じる。」



第 30 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：科学コミュニケーターは職業にできるのか？
- ゲスト：本田 隆行（科学コミュニケーター（フリーランス））
- 日時：2017 年 7 月 18 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントcommons 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 7 月 18 日（火）は、記念すべき 30 回目の「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）でした（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今回は、科学コミュニケーターの本田隆行さんをお招きし、「科学コミュニケーターは職業にできるのか？」というテーマを取り上げました。この日の参加者は、12 人（うち、大阪大学教職員 4 人）でした。

本田さんが大学院を卒業してから、フリーランスの科学コミュニケーターになるまでの経緯を伺い、そして、今何を仕事にしているのかを紹介していただきました。枚方市役所に 3 年間務め、その間にはソーシャルワーカーから、環境担当、広報担当まで幅広い部署を経験したそうです。ふと目にした日本科学未来館の科学コミュニケーター募集の記事がきっかけで、転職を決意。日本科学未来館では、科学コミュニケーターとして展示解説をしたり、NHK E テレ「サイエンス ZERO」に出場して、初代キングオブサイエンスコミュニケーターになったり。



フリーランス科学コミュニケーターになったのは、2015 年の夏です。フリーランスになる前に、周りの人に相談をしたときには、「科学コミュニケーターは職業じゃない。職能だ。」と言われ続けたそうです。それでも、「未来館の外に出たらどうなるんだろう？」とチャレンジしたい気持ちが勝って独立。今は、いろいろな人のつながりで、いろいろなお仕事をされているそうです。例えば、科学イベントの司会、科学館や博物館の展示監修、科学絵本の監修などなど、本当に幅広く活動されています。

質疑応答の時間には、「科学コミュニケーター」という職業に興味のある学生さんから、たくさんの質問が飛び出しました。その中の 1 つは、「フリーランスとしてやっていけている秘訣ってありますか？」というもの。本田さんの答えは、「コミュニティに溶け込むことができること。でも、染まりすぎないことも大事。それは、枚方市役所でソーシャルワーカーとして働いた経験が活きているかもしれない。」というものでした。

参加者からの感想を一つだけご紹介します。「非常にわかりやすく、興味深い話を聞かせていただきました。今回のお話を受けて、自分が将来こういった形で活動を行っていくのかを改めて考えていきたいと思いました。」

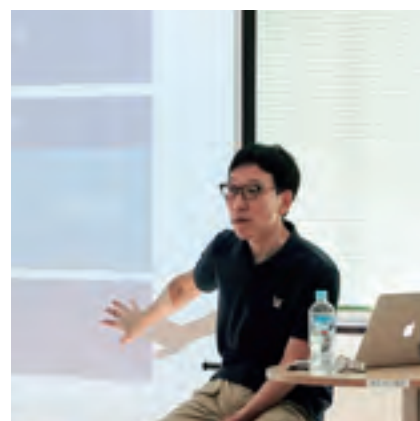
第 31 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：企業によるイノベーションの促進
- ゲスト：青島 矢一（一橋大学イノベーション研究センター 教授）
- 日時：2017 年 8 月 10 日（木）13:00～16:10
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 8 月 10 日（木）、一橋大学イノベーション研究センターの青島矢一先生をお招きして、第 31 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「企業によるイノベーションの促進」を開催しました。この日の参加者は 12 人。普段 STiPS が提供する授業を履修している学生が主でしたが、他にも工学部の学生や学内の教員が参加していました。

前半の 90 分は、青島先生から、経営学の観点からみた企業活動の概要や、企業によるイノベーションの事例についてのお話を聞きました。その後、後半の 90 分では、2 つのグループに分かれてディスカッションを行いました。

それぞれのグループに与えられたディスカッションのお題は、「企業のイノベーションを促進するために、企業に所属する者（経営者および社員）の観点（企業の内側の観点）から何が出来るか」そして、「企業のイノベーションを促進するために、政策立案の観点（企業の外側の観点）から何が出来るか」というもの。最後は、各グループでの議論の内容を共有し、青島先生を交えた全体ディスカッションも行いました。



第 32 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：自然史博物館が創り出す新しいコミュニケーションのかたち
- ゲスト：三橋 弘宗（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）
- 日時：2017 年 12 月 5 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 12 月 5 日（火）に、大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロンにて、第 32 回 STiPS-Handai 研究会「自然史博物館が創り出す新しいコミュニケーションのかたち」が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日は、授業「科学技術コミュニケーション入門 B」に履修登録をしている学生さんに加えて、外部の方、大阪大学教職員など計 11 人が参加しました。

今回は、兵庫県立人と自然の博物館で主任研究員をされている三橋弘宗さんを講師にお招きしました。50 分ほど三橋さんのお話を聞いた後で、質疑応答に移りました。

もともとは土木工学を専攻されていたという三橋さん。その後、基礎理学や陸水学、保全生物学へと活動のフィールドを広げてこられました。今は環境保全学や生態系保全学に深く関わっておられますが、これまでの多様な分野での研究経験が現在の活動につながっているそうです。

講演の中で紹介された三橋さんのお仕事の一つに、昆虫や植物などを樹脂で固めて作る「触ることができる（ハンズオン）標本」があります。この標本により、博物館を訪れた人がその動植物をより身近に感じることができます。この標本作成技術を、兵庫県内の高校のキノコ部に提供したりもしています。開催したキノコ展のリアルな展示は共感呼び、多くのメディアでも紹介されました。キノコ部の部員の中には、大学に進学してさらに研究を深めたいと考える人や、学校教員を志望する人、活動を通してシミュレーション技術を学んだ人など、部員のそれぞれが科学と関わるような良い影響が生まれました。さらに、高校の美術部にポスターを作成してもらったり、これまでのキノコの収集活動の記録からデータベースを作って解析したり、キノコ展示の場を広げるなど、より多くの人がこの活動を認知し、関わるようになったそうです。このように、「一見難しく、出来ないと思ってしまう」技術を誰もが作成できるようにダウンサイジングした結果、キノコ部の活動のように、様々な成果を生み出し、多くの人に認められ、影響を与える「科学コミュニケーション」が行われたことが分かりました。これは博物館ならではの取り組みです。難しそうなことを誰でもできそうだと思うことでさまざまな展開が生まれていました。

このほか、行政に依存しすぎずに自然再生を確実にする「小さな自然再生」のプロジェクトにも関わっておられました。小さな自然再生とは、自分たちで調達できる予算の範囲で、計画や作業に様々な人が参画し、手直しや撤去も速やかにすることができる自然再生のことです。小さな自然再生では、大きな事業と違い一人一人が少しずつできるレベルで続けていくことを特に大切にしています。その小さな成功を続けることで自治体や地域も認め、動いてくれるようになると話されていました。例えば、川にある段差によって、オオサンショウウオがその段差を自力でのぼれず上流で産卵できなくなっていると



ころがありました。そこでオオサンショウウオでも登ることができるように、石を詰めた枠を積んで一段あたりの高さを低くするという改善を行いました。これは行政に工事を頼んだものではありません。ほかにもこういった自然再生が市民活動として実践・継続されているそうです。

今年の夏大きく騒がれたヒアリの問題にも、三橋さんは日本生態学会の近畿地区会の会長として関わることを余儀なくされました。過去、セアカゴケグモが発見されたときには、研究者間のコンセンサスがなかったり、一部の研究者に負担が集中したりしていました。その時の経験を踏まえ、今回は、全国の博物館や研究施設でネットワークを作り、ヒアリの標本や情報を、研究者や行政、民間企業で共有することで、各地で発見されるアリの鑑定や専門家がサポートする体制を全国に整えたそうです。日本生態学会として国土交通大臣と環境大臣に要望書を提出する際にも、担当者として三橋さんが大きな貢献をされたそうです。

ここからは会場からの質問に答える形でお話が進みました。「高校生への指導に際して工夫している点は？」という質問には、「生徒に自分でなんでもやってもらう。生徒の興味に合わせて次のステップを生徒自身にさせることを大切にしている。」とおっしゃっていました。先生主導ではなく生徒が中心になって進めることで、将来科学に携わる人材の育成にもつながっているのではないかと感じました。他にも「市民の人と一緒に活動をするときに、“本当はもっとこうして欲しかったのに”ということはあるんですか？」「多様な活動はどのようなきっかけで始まるのでしょうか？」といった質問が出ていました。

三橋さんは博物館の立場で行政の内側と外側に適度な距離感で関わり、学校教育とも連携しながら生態系管理が循環する仕組みをつくることに取り組まれていました。これらのお仕事は、多岐の分野にわたっており、すべてを通して様々な「科学コミュニケーション」が行われていることが分かりました。

文：新貝 桃佳（医学部4回生）、「科学技術コミュニケーション入門B」担当教員



第 33 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：宇宙開発プロジェクトとコミュニケーション
- ゲスト：筒井 史哉（宇宙航空研究開発機構（JAXA）経営推進部 次長）
- 日時：2017 年 12 月 12 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 12 月 12 日（火）に、大阪大学 吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロンにおいて、「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）が開催されました。今回は、「宇宙開発プロジェクトとコミュニケーション」というタイトルで、ゲストには宇宙航空研究開発機構（JAXA）の筒井史哉さんをお招きしました。授業「科学技術コミュニケーション入門 B」に履修登録をしている学生さんに加えて、外部の方、大阪大学教職員など計 13 人が参加しました。



筒井さんは東京大学工学部航空学科をご卒業後、宇宙開発事業団（NASDA）（JAXA の前身の 1 つ）に入社し、国際宇宙ステーション（ISS）に関わるお仕事、特に日本実験棟「きぼう」の開発に十数年従事されていました。その後は宇宙航空研究開発機構（JAXA）の経営推進部にてお仕事をなさっています。国際宇宙ステーション（ISS）や筑波宇宙センターの試験設備について、図や写真を使いながら紹介してくださいました。

JAXA が担っているのは、宇宙関連事業に関して、政府、研究者、メーカー、海外宇宙関連機関、そして国民の間を仲介するという役です。分かりやすく例えて説明すると、仮に政府から「新たな GPS 衛星がほしい」といった要望が来たとします。そうしたときに、JAXA の持つ宇宙の知見を駆使して、そもそも財政的・技術的に新たな GPS 衛星を作ることができるのかといったことを中央省庁と相談したり、搭載すべき機能を明確化して具体的な設計案や企画実行の手順を整えて企業に発注をしたり、国民にその意義を説明し是非を問うたりする必要があります。要するに宇宙に関する漠然とした要望を具体的な設計案に変え、実行に移すことが、JAXA にとっての重要な仕事だということです。

筒井さんは他の事業とは違う宇宙事業ならではの開発に伴うリスクとして、次の 2 点を挙げられていました。

- 1) 宇宙の環境は、未だに解明されておらず設計の際に明確な条件設定が難しい場合がある点、また、解明されていても地上の試験で再現できない場合がある点
- 2) いままでに無いものを開発する場合はとくに、ユーザーの要望が曖昧であることが多い点

リスクをとって条件を設定したり、曖昧な要望を具体的な設計に落とし込んだりするのが JAXA の役割だそうです。

さらに、宇宙事業に関して、「JAXA とメーカーとのコミュニケーション」、そして「JAXA と国民のコミュニケーション」についてもお話がありました。まず、JAXA とメーカーとのコミュニケーションの際に気をつけているのは、以下のことだそうです。

- ・ 情報伝達は必ず後に残る形ですること
- ・ 読んだ、見た相手が自分と同じものを想像できるような資料を作ることに細心の注意を払っていること

誤解されないように、そして、曖昧さをできるだけ消すように心がけるのだそうです。宇宙ステーションの他国のモジュールとのインタフェースの設計でも、ミリ、マイクロ単位での誤差が動作の成功失敗に関わって来るため、細密な心遣いをしているそうです。

JAXA と国民のコミュニケーションにおいては、以下のことを大切にされているとか。

- ・「face to face」で気持ちを伝達すること
- ・情報の示し方は相手に合わせて考えること

わからないことはわからないと伝える。現在の時点でわかっていることをできるだけ詳細に、早く伝える。そうすることが、今回の失敗の経験を踏まえ次に向けて真摯に取り組んでいるということを理解してもらうために重要だということを、天体観測衛星「ひとみ」の失敗のときの経験を踏まえながらおっしゃっていました。

以前は、プロジェクトの成果の説明や宣伝が主だったという「JAXA と国民のコミュニケーション」ですが、最近では徐々に計画段階に多様な人々を巻き込むというタイプのコミュニケーションにもチャレンジしつつあるそうです。2017 年 12 月 8-9 日に開催された「月極域探査に関するワークショップ」がその 1 例として紹介されました。月探査に関する専門家だけではなく、別の分野の研究者や民間企業、一般の方を対象にしたワークショップでした。

最後の質疑応答の時間では出席者からたくさんの質問が飛び出しました。例えば「宇宙関連技術は、もうアメリカやEUに任せてしまってもいいのでは？ということはありませんか？JAXA がわざわざ独自に取り組んでいる意義はどういうところにあるのでしょうか？」というもの。筒井さんは、「世界に負けない技術的な競争力を日本企業につけてもらいたい。将来に向けて国内に技術を残し、産業を育てることができるとい意義もあるのではないか」というお答えをされていました。

JAXA は宇宙の謎を解明すべく宇宙探査の計画・設計をしているのみならず、宇宙の持つ神秘性・未来性に対する国民の関心を損なわないようなコミュニケーションにも努力している、ということを理解できた、密度の高い 90 分の研究会でした。

文：平田 了也（人間科学部 2 回生）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員



第 34 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：科学と社会の〈間〉に立つメディア論
- ゲスト：石戸 諭（BuzzFeed Japan 記者）
- 日時：2017 年 12 月 19 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 12 月 19 日（火）に、大阪大学 吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロンにて、第 34 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「科学と社会の〈間〉に立つメディア論」を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。大阪大学の学生、教職員など 11 人が参加しました。

今回は、BuzzFeed Japan の記者である石戸諭さんをゲスト講師としてお招きしました。以前は大手新聞社の社会部で記者をされていたが、現在は専門を設けず幅広い分野に関してオンラインメディアに掲載する記事を書いておられるそうです。

まずは、現在のメディア全般に関して、科学とメディアの関係に関して、多様な観点を提示していただきました。

例えば・・・

- ・同じ事実を見ているのにも関わらず、その報道のされ方や市民の受け取り方にはギャップがあり、その「すれ違い」を見ることができるところにもメディアの面白さがある。
- ・オンラインメディアの出現により、ここ数年で既存メディアと報道のあり方に関して大きな変化がおきている。記者に求められる能力も基本は変わらないが、変化への対応が求められている。例えば、インターネットメディアでも今までは新しいものをより早く伝える「速報」的な側面が重視されていたが、最近ではそれだけでなく、取材力と分析力がさらに求められる「特集」的な記事にも価値をおくメディアもでてきた。
- ・ネット上には記事がアーカイブされていくことになる。古いものでも“新しい”ものとして共有されることがある。“新しい”状態を保持することができる分、いつ読んでも古くならない記事を残せるかが問われる。動画という伝え方に関しても、テレビでは一瞬で消費されてしまうが、ネット上の動画配信サービスが提供されているようになり、時間的耐久性が強く求められるようになったともいえる。
- ・メディアは専門家コミュニティと市民の中間にあるべきもの。どの集団やどの情報を信頼し、どの事実を伝え、なにが議論されているのか。伝える情報が何か選別する機能を一義的に任されているところがある。
- ・新聞社の強みとして、組織力が強く記者の教育体制が整っていること、「硬いメディア」として一定のニーズがあることがあげられる。
- ・メディアとの親和性の有無だけでなく、出るべきとされている領域とそうでない領域がある。その中でどこに取材し、どう報道するかはメディアにかかっている。「出たい」人だけではなく、自分からは出たがらない研究者を発掘できる方が面白い。



・科学や研究分野に関しては、読み手に判断を任せて誤解されてしまうとその研究自体が信頼を失ってしまい、結果として、その分野の不信感や不満に繋がる場合もある。娯楽的な面白さの感覚とは別でとらえられるべきである。

後半は質疑応答の時間。新聞とオンラインメディアの違いについての話題が多くでました。その一部をご紹介します。

Q. オンラインメディアだからこそ伝わりやすいジャンル、伝わりにくいジャンルというものはあるのでしょうか？

A. オンラインメディアだからこそ伝わりやすいジャンルというのは特にはないのではないかな。ジャンルというよりも記事の書き方による。伝え方次第なのではないかな。記者はクリエイティブな仕事だと思っている。

Q. 科学技術や医療に関する話題がメディアに取り上げられる時によく「両論併記」がされる（Aという説もあるけれど、Bの可能性もあるというように）けれど、それはそれで誤解を招くのではないかと思うことがある。

A. 両論併記するかどうかは、その話題による。必ずしも併記することが必要だとは思ってない。併記するにしても、50対50で意見が分かれているように書くのではなく、少数意見はあくまで少数意見と明記して書くべきだとは思っている。

新聞では掲載できる文字数に限界があるので、型どおりの両論併記になりがちのところがあるが、オンラインメディアにはフォーマットが存在しない。文章量にも制限がないため、読み手にゆだねるような「ゆらぎ」を残した記述をすることも可能。

両論併記を否定する必要はない。両論があると書くのはメディアとして一種の「責任の取り方」でもある。

文：三原 明穂（医学系研究科 博士前期課程1年）、「科学技術コミュニケーション入門B」担当教員



第 35 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：“市民による市民のための科学”の成立と展開—コミュニケーションの視点から

○ゲスト：上田 昌文（NPO 法人市民科学研究室 代表理事）

○日時：2018 年 1 月 9 日（火）16:20～17:50

○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン

○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2018 年 1 月 9 日（火）に、第 35 回 STiPS Handai 研究会「“市民による市民のための科学”の成立と展開—コミュニケーションの視点から」を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今回は、NPO 法人 市民科学研究室（以下、市民研）の代表理事を務める上田昌文さんをゲスト講師としてお招きし、市民研の活動について紹介していただきました。この研究会には、授業を履修している学生や大阪大学教職員など 9 人が参加しました。

市民研はリビングサイエンス（生活を起点にした科学）という概念を手掛かりに「生活者にとってより良い科学技術とは」を考え、そのアイデアの実現を目指す NPO 法人です。ウェブサイトはこちら

(<http://www.shiminkagaku.org/csi-j-first-time/aboutus/>)。市民研が設立されたのは 1992 年 7 月（法人格所得は 2005 年 3 月）とのことですが、上田さんが市民研の専業として「食べていけるようになった」のは、ここ 10 年のことだそうです。現在の組織の収入は 300 人弱の会員からの年会費や寄付によって賄われているそうです。

市民研の活動としては、テーマごとに分かれた研究会が主体で、電磁波やナノテクノロジー、防災、低線量被ばくなど、様々な分野に取り組んでいます。その他の活動として、以下のような取り組みを行っています。

- ・講師を招いて開催する市民科学講座
- ・隔月で発行される機関紙「市民研通信」
- ・メーリングリスト運用（会員限定サービス）
- ・HP 更新（1 日 1 篇の注目の文献紹介など）
- ・電話相談受付

当日のお話の中で一番印象に残ったのは、東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故後の、放射能に関する市民研の活動でした。東日本大震災後、原子力発電所の事故により、多くの人々がこれまで意識してこなかった被曝リスクについて、日常生活の中で様々な判断が求められるようになりました。そんな時、上田さんは子どもを持つ東京の女性から電話相談を受けました。「放射能は大人より子供の方が、影響が大きいと聞いているが、子どものことを語ってくれる情報がネット上にはない。また、子供自身に分かるように話してくれる人は誰もいない。だから何とかしてほしい。」

相談者に実際に会って話を聞いてみると、話の中でイラストを描くのが得意な方だと分かりました。「それを活かして一緒にワークショップを作りませんか？」ということで、子ども向けに放射能のことを伝えるワークショップを開催することになったそうです。その後、支援者が増え、場所を東京から千葉、埼玉と拡大して継続開催されました。



やがて、この活動が行政や NGO に認知され、子ども支援の国際 NGO である「Save the Children Japan」や環境省除染情報プラザと協働し、それまで中学校では手が回らなかった、子ども向け放射線教育が行われるようになりました。この放射線教育では、放射能に関する科学的知識だけではなく、社会的な問題（風評・避難・対人関係）も取り扱っています。（*2013 年 12 月から Save the Children Japan と市民研が共同で進めてきたワークショップ「放射能リテラシーワークショップ」の成果がハンドブック『みらいへのとびら』（<http://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/tobira.pdf>）にまとめられています。）

また、放射能に関するワークショップを開催しただけでなく、福島市や伊達市などで子ども向けに線量計が配布されるようになったのも市民研の上田さんの提言がきっかけだそうです。震災後すぐ、上田さんは放射能に関する電話相談がきっかけで伊達市を訪れました。そこでは高校生が放射線量の測定されていないグラウンドで運動部の部活動をしていることを知り、これはさすがに問題だろうと考えました。その後、医療従事者用の線量計を製作しているメーカーに、線量計を安く大量に配布できないか問い合わせ、「やってみましょう」と返事をもらいます。そして、現地の市議会議員さんにつけあひ、市議会を経たのち、伊達市・福島市の子どもに線量計が配布される運びになりました。その後、福島のほとんどの地域で、大人も含めて線量計の貸し出しが定着しました。

その他にも、ロシアの研究者と繋がりを持つ研究会のメンバーを通じて、国際シンポジウムを開催したり、東京大学と連携して放射線の健康影響に関して意見の対立する専門家を交えた意見交換パネルを開催したり、非常にスケールの大きな活動に従事されています。

他にも、身近な日常生活に潜むリスクへの取り組みの具体例として、スマートフォンなどの家電製品から発生している電磁波、消臭剤に使用されている化学物質、化粧品や日焼け止めクリームなどに用いられているナノ粒子を挙げていただきました。不安を感じた相談者に対して、市民研でどのような調査を行い、相談者や他の関係者（市民、市民研会員、メーカーの技術者、行政、政治家等）にフィードバックするか、事例紹介をしていただきました。いずれのケースにおいても、製品の「安全性」はメーカー側で確認されているかもしれないが、ユーザーである、わたしたちの使用状況が技術者側に把握されているか（生活の中でのトータルな曝露量はどれくらいになるのか、メーカーの想定していない使用方法で使用者が危険を被っていないか）、などが問題点として挙げられるそうです。

今回の研究会では、市民研の活動の様々な事例を紹介していただきましたが、1) 被害の現場とどのように繋がるか、2) 反証のための科学データをどのように得るか、3) いかに社会での認知を高め、支援を得るか、4) 政治的決着に向けてどう動くか、というプロセスを、事例に合わせて適当な経路で展開していくことが重要であると感じました。

市民研のこれまでの活動内容や、今後の活動予定は、市民研のウェブサイト詳しくまとめられています。単なる活動報告掲示板ではなく、市民研で蓄積された運営情報や文献、関わった研究者の膨大な知見が保管された貴重なアーカイブになっています。市民研の活動にご興味を持たれた方は、どうぞご覧ください。

NPO 法人 市民科学研究室

<http://www.shiminkagaku.org/>

文：横山 高史（工学研究科 博士後期課程）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 36 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：3. 11 後の原子力政策

○ゲスト：上川 龍之進（大阪大学大学院法学研究科 准教授）

○日時：2018 年 1 月 11 日（木）14:40～17:50

○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 C

○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2018 年 1 月 11 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階セミナー室 C にて、第 36 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「3. 11 後の原子力政策」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。今回は、大阪大学大学院法学研究科の上川龍之進 准教授（写真の左が上川先生）をお招きしました。この研究会には、授業の受講生 5 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など計 12 人が参加しました。

研究会の前半は上川先生からの講演で、後半は質疑応答とディスカッションの時間でした。

上川先生は、もともと、金融政策・金融行政に関するご研究が専門でした。ところが、3. 11 後の福島第一原子力発電所の事故を受け、日本学術会議の東日本大震災学術調査をきっかけとして、原子力政策についての研究にも関わるようになったのだそうです。複雑な経緯が絡み合った原子力政策。現状を理解するためには、それらの経緯を 1 つ 1 つ紐解かなくてはなりません。今回の STiPS Handai 研究会では、2011 年 3 月 11 日以降の政権の動きや、政策策定の流れについて、詳細な経緯をご紹介いただきました。

講演の最後、上川先生から提示された論点は以下の通りです。休憩をはさんで後半は、これらの論点にも触れつつ、参加者を交えた議論の時間になりました。

- 1) なぜ経済的に合理的とは考え難い政策が決定・実施されることがあるのだろうか。
- 2) 専門性の高い政策について、国民世論と専門家の賛否が分かれた場合、どちらが優先されるべきであろうか。
- 3) 裁判所や中央銀行のように、専門性の高い領域においては、専門家が政治から独立し判断を行うことが認められている（むしろその方が望ましいとされている）。そのような政策分野であれば、非民主的な決定は許容されるのだろうか。電力・エネルギー政策や安全保障政策についてはどうであろうか。
- 4) 専門家の意見が一致しない場合、政策の是非についてどのように判断すべきなのだろうか。
- 5) 科学が発展すれば、政策をめぐる対立はなくなるのだろうか。

参加者からは、「原発事故に関しては、メディア等を通して色々聞いていたつもりだったが、今回のように“線”として流れを追ったのは初めてで、新しく聞く話も多くあり勉強になった。」「外国との関係や、原発のある自治体、与党を支援するのが電力会社であることなど、様々な利害関係がある中で下された最終的な政治判断が原発回帰という結果になったという事実だけを見ると、国民の声は政策決定の中でどう反映されたのか、という疑問が生じた。」という感想が寄せられました。



第 37 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：科学技術「反省」白書にこめた思い
- ゲスト：行松 泰弘（内閣府 宇宙開発戦略推進事務局 審議官）
- 日時：2018 年 1 月 16 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2018 年 1 月 16 日（火）、内閣府宇宙開発戦略推進事務局審議官の行松泰弘さんをお招きして、第 37 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「科学技術『反省』白書に込めた思い」を開催しました。この日の会場（大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階交流サロン）には、10 人が集まりました。授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の受講者だけではなく、学外からお越しの方や大阪大学の教員も参加しました。

行松さんにはまず 40 分間ほどで、自己紹介とこれまでに取り組まれたお仕事の紹介をしていただきました。行松さんは現在、内閣府宇宙開発戦略推進事務局に所属されていますが、最初は科学技術庁からそのキャリアをスタートされています。入庁後から約 30 年の間におよそ 20 の部署を経験し、様々な業務に取り組まれてきたそうです。例えば、理化学研究所や大型放射光施設（Spring-8）といった科学技術の推進・整備のための業務や、原子力防災対策や放射性廃棄物対策といった科学技術の利用に伴って生じる社会課題への対策に関わったりされたのだそうです。また、外務省への出向経験もお持ちで、在露大使館科学担当としてロシアに滞在されたこともあるそうです（集中的な特訓を受けてわずか三ヶ月でロシア語の新聞記事を読めるようになったのだそう）。2001 年以降は文部科学省で同じく科学技術政策に携わり、生涯学習やスーパーサイエンスハイスクール（SSH）などの教育系の事業も手がけられました。そして、2012 年には今回の研究会のタイトルでもある科学技術白書の執筆において中心的な役割を担われています。

科学技術白書は、各年代において、どのような時代背景及び政策的意図の下でいかなる施策が講じられていたのかを記録する、歴史のテキストのような役割を担っています。今回のタイトルの一部である「科学技術『反省』白書」は 2012 年 6 月の読売新聞の見出しから引用されていますが、『反省』とあるように、2012 年版科学技術白書は東日本大震災をきっかけに顕在化した科学技術に関する様々な課題や教訓を記したものになっています。

行松さんにはこの課題や教訓について詳しくお話していただきました。東日本大震災により顕在化した課題として、1) リスク評価等のリスクへの対応が不十分であったこと、2) 専門家による科学的知見の提供が適切になされなかったこと、について、いくつか例を交えて説明されました。そして、これらの課題が原因となり科学への不信感を募らせてしまった社会に対し、再び科学への信頼を構築してもらうための取り組みについてのお話がありました。欧米諸国にみられるような科学的助言の仕組み（科学的判断と政策的意思決定を区別する、専門家の見解の不一致に対応する、等）が日本には欠けており、リスク等を踏まえた政策判断を迅速かつ的確に行うための仕組みの構築が必要であるとのことでした。

また、東日本大震災に対する日本学術会議の声明についても言及がありました。この声明では、科学的な助言と政策判断を「峻別する」という認識が表明されており、この「峻別」という言葉が 2012 年度



版科学技術白書で最も注目して欲しかったポイントだと紹介されました（2012 年度版科学技術白書の p. 103 にこの言葉は出てきます）。リスクと利益の比較的観点や科学技術の不確実性の捉え方について考慮し、科学的助言と政策決定を峻別することが大事なポイントだと理解できました。またこのお話の後、実際に科学的根拠と政策決定を峻別するべき事例についてもご紹介いただき、リスクコミュニケーションの話とも絡めてご説明いただきました。

そして最後は、これらの話から出てきた安全基準についてお話しいただき、レギュラトリーサイエンス領域を政策決定に活かしていくことの必要性や、同時に国民一人一人がリスクを正しく認識することの重要性について触れ、お話しを締めていただきました。

行松さんの話題提供に引き続いて行われた質疑応答・ディスカッションの時間には、リスクコミュニケーションの課題や、行政が設定する基準値などについて、熱心な意見交換が繰り広げられました。

文：吉田 篤（理学研究科 博士前期課程 1 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員



第 38 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：日本の科学技術イノベーション政策の現状
- ゲスト：中澤 恵太（文部科学省 科学技術・学術政策局 企画評価課 政策科学推進室長・企画官）
- 日時：2018 年 1 月 25 日（木）14:40～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 C
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2018 年 1 月 25 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階セミナー室 C にて、第 38 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「日本の科学技術イノベーション政策の現状」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。この研究会には、授業の受講生 5 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など計 12 人が参加しました。

今回のゲストは、文部科学省の中澤恵太さんです。研究会の前半は中澤さんから、今の日本が置かれている現状や科学技術イノベーション政策の概略、文部科学省内での具体的な政策立案について、また、中澤さんご自身が取り組まれてきた事業についてのお話を伺いました。後半は質疑応答や配布資料の補足説明などが活発に行われました。

中澤さんは、2017 年 7 月から、文部科学省内の科学技術・学術政策局企画評価課というところで、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業（SciREX）に関わっていらっしゃいます。その前は、産学官連携や大学発ベンチャーに関わる施策を担当されていたということで、今回の研究会では、大学発ベンチャーにまつわるお話を多く聞かせていただきました。

研究会に参加していた学生からは、「丁寧に説明してくださって、とてもわかりやすかった。どのように政策が動くのか、イメージがつきやすくなった。」「科学技術は政策としてアクションを起こしてから成果がでてくるまでのパスが非常に多く、時間がかかるというのは確かにおっしゃる通りだと思った。目的やステークホルダーが多いが故に万人が利益を得られるような政策立案の難しさを感じた。」という感想が寄せられました。



🍷 共催：学術政策セミナー

研究者、事務系職員、URA 業務に関心のある方を対象に企画された「学術政策セミナー」（主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室）が開催されました。

【共催イベント】第7回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：社会から共感を得る大学となるために
- 講演者：小林 傳司（大阪大学 理事・副学長）、岸本 幸子（公益財団法人パブリックリソース財団 専務理事）
- 日時：2017 年 7 月 11 日（火）13:30～15:30
- 場所：大阪大学吹田キャンパス サイバーメディアコモンズ
- 主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2004 年 4 月に国立大学が法人化してから、十数年が経過しました。法人化される際に、国立大学は、財政的な面において国からの自律的な運営が求められました。また、ガバナンスという視点からも役員や経営協議会委員に学外者の参画を促し、学長中心に大学が運営されることが期待されていました。更に、国立大学内の改革と併せて、社会との関係も変化が生じています。2015 年に出された「国立大学経営力戦略」では、「国立大学が、社会変革のエンジンとして「知の創出機能」を最大化」をしていくことなど、より一層社会とのかかわりも求められるようになり、社会のステークホルダーと共に課題を解決することが期待されています。

本セミナーでは、話題提供 1 において上記のような大学が置かれた現状について、参加者との問題共有を行いたいと思います。次に話題提供 2 では、社会のステークホルダーから「共感」や「信頼」を得るためにどうすればよいかを考えるヒントとして、公益性の高い組織・仕組みへの寄附について話題提供を頂きます。

その上で、「社会から共感を得る大学」の役割を考え、参加者一人一人がそのためにどのようなことをすべきかについて議論を行いたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁等の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。（告知文より）



【共催イベント】第8回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：研究を支える多様な仕掛け
- 講演者：野地 澄晴（徳島大学 学長）、中辻 憲夫（一般財団法人中辻創智社 代表理事）
- 日時：2017年10月26日（木）13:30～15:30
- 場所：大阪大学 吹田キャンパス サイバーメディアコモンズ
- 主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

昨今、研究を支える仕組みが多様化しつつあります。基礎的な研究に取り組むためには科研費をはじめとした国の競争的資金はとても大切な資金源ではありますが、研究分野によって、或いは、研究のアプローチによっては、他の資金源を活用することができるかもしれません。一方、研究の振興には将来の研究を担う若手研究者の育成が欠かせません。

本セミナーでは、話題提供1において大学が、クラウドファンディングやクラウドソーシング等を利用しながら研究を支える仕組みづくりをしている事例を紹介していただきます。次に話題提供2では、基礎研究の研究者でありながら、ベンチャー企業を立ち上げ、得られた資金をもとに、広く若手を支援する財団を立ち上げられた事例をうかがいます。



その後の全体討論では、大学が社会のステークホルダーの協力を得て研究に取り組むために望ましい、「研究を支える多様な仕掛け」についてそれぞれの立場から議論を行いたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁等の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。（告知文より）

【共催イベント】第9回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：役に立つ大学とはどういうことか？
- 講演者：藤原 明（りそな総合研究所 リーナルビジネス部長）、木村 めぐみ（一橋大学イノベーション研究センター 特任講師）
- 日時：2018年3月14日（水）13:30～15:30
- 場所：大阪大学 吹田キャンパス テクノアライアンス棟1階 アライアンスホール
- 主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

近年、学術研究においても社会的インパクトが求められるようになってきました。特に、2015年9月に国際連合において採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」では、先進国を含む国際社会全体の開発目標とした国際的なアジェンダが提示されました。このような社会に存在する様々な課題を解決するために、大学が蓄積する多様な知識はどのような貢献ができるのでしょうか。

本セミナーでは、話題提供1において金融機関の研究所に所属しながら地域の課題解決に協力をしてこられた経験から大学が持つ知識はなにに貢献しうるのかについてお話を頂きます。話題提供2においては、英国の事例をもとに学術研究において蓄積された知識がどのように社会に流通し得るのかについてお話をさせていただきます。



大阪大学は、持続可能な共生社会を実現するための諸課題の解決策を提案するシンクタンク組織、社会ソリューションイニシアティブ（SSI）を2018年1月に設立しました。大学がひとつの組織として、社会とかかわり「役に立つ」にはどうすればよいのかを参加者のみなさんと考え、大学の構成員である私たちの理解も深めたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。（告知文より）

🍷 その他

C0 デザインカフェ 第2回「超スマート社会に潜むワナ？」

- タイトル：超スマート社会に潜むワナ？
- カフェマスター：菅原 裕輝（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- 日時：2017 年 6 月 12 日（月）12:10～12:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育総合棟 I（3 階）341 号室
- 主催：大阪大学 C0 デザインセンター
- プログラム提供：副専攻プログラム/高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」

「C0 デザインカフェ」の第2回は、副専攻プログラム/高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」が提供するプログラム。カフェマスターは、菅原裕輝さん（C0 デザインセンター 特任助教）でした。9 人の学生さんに加えて、C0 デザインセンター関係者 7 人が会場に。

さて、今回のカフェは、こんな問いかけから始まりました。「Google で分からないことを検索するときや、Facebook で友だちと交流するとき、あるいは Amazon を利用して何かを買うとき、何か違和感を感じたことってありますか？」

「違和感？ あんまり感じたことはないかなあ。」

「Amazon にオススメされるものはなるべく見ないようにしている。読むものが偏ってしまいそうだから。」

「ツールにオススメされて、効率よく欲しい情報にたどり着けたらそれでいいのでは？」

「でも、オススメされるものの外側にもっといいものがあるかもしれないよ？」

いろんな意見が出てきましたが、最後は菅原さんが、インターネット活動家で著述家のイーライ・パリスが指摘した「フィルターバブル (filter bubble)」という概念を手がかりにして、新しい情報テクノロジーが浸透した社会のベネフィットとその対価をまとめて紹介していました。



【共催イベント】C0 デザインセンター 共創イノベーションセミナーシリーズ

- タイトル：大学における科学コミュニケーション教育と高度汎用力
- 日時：2017 年 11 月 20 日（月）14:00～17:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構総合棟 I サイエンスコモンズ サイエンス・スタジオ A
- 主催：大阪大学 C0 デザインセンター
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 11 月 20 日（月）、14 時より、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 サイエンスコモンズ サイエンス・スタジオ A にて、C0 デザインセンター共創イノベーションセミナーシリーズ「大学における科学コミュニケーション教育と高度汎用力」を開催しました。話題提供者も含めて、11 人が参加し議論を交わしました。

本セミナーでは、来日中の Prof Sue Stocklmayer と Prof Mike Gore の両氏をお迎えしました。お二人は、豪州の大学における科学コミュニケーション教育・研究・実践の中心的拠点である Australian National Centre for the Public Awareness of Science（豪州国立大学）の活動を長くにわたって牽引されてきました。



今回のセミナーを通じて、同センターで行われてきた科学コミュニケーションの教育や実践についての経験を参加者と共有して頂きました。また、主に大学院レベルでの科学コミュニケーション教育プログラムで学んだ学生が、プログラム修了後、社会の様々なセクターで活躍している様子についてのお話もありました。

休憩を挟んで、次は、C0 デザインセンターの教員 3 人から、各々が中心に取り組んでいる高度汎用力教育プログラムについての紹介がありました。山崎吾郎准教授からは、超域イノベーション博士課程プログラムで取り組んでいる PBL 型授業について。上須道徳特任准教授からは、サステナビリティ・サイエンス教育プログラムについて。渡邊浩崇特任准教授からは、副専攻プログラム・高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」について。それぞれ、教育プログラムの内容や、学内・学外連携の形態などを含めて、情報共有して頂きました。

話題提供の後には、ディスカッションの時間となりました。高度汎用力教育プログラムの在り方やプログラム開発を行う上での課題や解決策について議論しました。教育プログラムに対して大学がどのような単位・修了証・学位を与えるべきかという問いや、学内の教員との連携を進める上での難しさについて、また、プログラムに入る学生の動機や、修了後のキャリアパスについて、多様な角度から情報共有・議論が行われました。

5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

2016 年度から、個別政策課題解決を目指した、拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）を実施しています。本拠点 STiPS は、大阪大学メンバーを中心としたプロジェクトと京都大学メンバーを中心としたプロジェクト、それぞれを進めてきました。ここでは、それぞれの取り組みをご紹介します。

阪大拠点プロジェクト

プロジェクト名

新しい科学技術の社会的課題検討のための政策立案支援システムの構築

Developing a Support System for Addressing the Social Impacts of Emerging STI

プロジェクト実施機関

代表拠点：大阪大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、京都大学、九州大学

プロジェクト期間

2016（H28）年 4 月～2019（H31）年 3 月

2017 年度プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 C0 デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）
- ・渡邊 浩崇（大阪大学 C0 デザインセンター 特任准教授）
- ・工藤 充（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- ・水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- ・菅原 裕輝（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- ・岸本 充生（大阪大学データビリティフロンティア機構 教授）
- ・小山田 耕二（京都大学学術情報メディアセンター 教授）
- ・小林 俊哉（九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授）
- ・城山 英明（東京大学公共政策大学院 教授）

プロジェクト概要

新しい科学技術の普及は、恩恵とともに様々な問題も社会にもたらします。研究開発の成果が円滑に社会に受容され、便益が最大化されるためには、対処すべき問題や実現されるべき価値・ニーズなどの社会的課題を研究開発の早い段階から漸次的に特定・検討し、政策立案や制度設計、研究プログラムの策定に効果的に反映することが望まれています。そこで本プロジェクトでは、新規科学技術の社会的課

題が政策立案等での確に検討・反映されるのを促進する「社会的課題検討のための政策立案支援システム（ツール）」を構築することを目指します。

具体的な内容

- (1) 政策立案支援システム設計に資する過去事例の集積・分析
 - ・過去の科学技術の社会的課題について、課題の特定・抽出および課題の対応に向けた方法論に関する国内外事例の先行研究についての文献調査。
- (2) 政策立案支援システムに対する現場ニーズの特定
 - ・現在、研究開発が進行中の新しい科学技術（特に超スマート社会に関連した科学技術）に関する政策現場および研究現場における社会的課題検討のニーズを探索。
- (3) 政策立案支援システムの基本設計の検討（2016 年度）
 - ・超スマート社会に関連した科学技術に関する市民の期待・懸念について、グループインタビューを通じた探索的な調査（2017 年 1 月 21 日、1 月 22 日実施）。
 - ・政策立案支援システムの基本設計の構築。
 - ・連携拠点、政策リエゾン、関連省庁の政策担当者、研究者、有識者を対象としたワークショップを通じた、政策立案支援システムの基本設計案に対する評価及び改善・再設計案の検討（2017 年 1 月 24 日@SciREX オープンフォーラム・企画セッション）。
- (4) 政策立案ワークショップ（WS）の基本設計と施行（2017 年度）
 - ・政策実務者・研究者対象（2017 年 7 月 14 日、7 月 28 日、9 月 8 日@霞が関）。
 - ・一般市民対象（2018 年 1 月 27 日@福岡市科学館）。

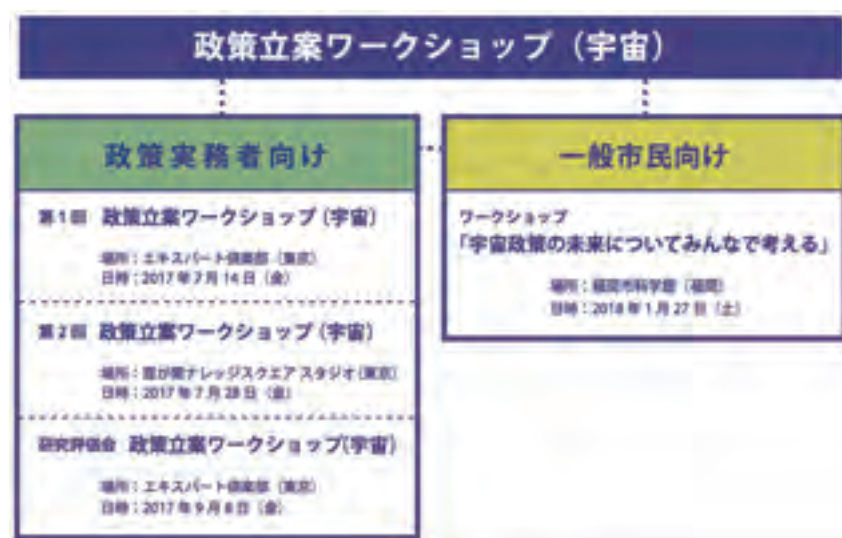


図 政策立案ワークショップ（WS）の基本設計と施行

2017 年度の主たる研究成果

政策立案ワークショップ（WS）を設計・施行し、政策立案者・研究者・一般市民からの情報・知見・意見の集約、課題の可視化や共有についての方法論を整理して、政策立案支援システム（ツール）の基本仕様を作り上げました。とくに、政策立案支援システム（ツール）としては、2016 年度に開発した「研究開発過程に即した課題特定」型のものに加えて、2017 年度は「政策オプション比較による課題特定」型を開発しました。また、政策立案ワークショップ（WS）の実施方法（プログラム構成等）や企画・運営ノウハウ、さらに主に一般市民向けで使用される「対話ツール」の基本仕様と制作ノウハウ、これらを蓄積することができました。



図 政策実務者向けの政策立案ワークショップの様子



図 一般市民向けの政策立案ワークショップで使った「対話ツール」

成果に係る発表及び報道

1) 2016 年度の成果を論文にまとめました。

工藤充, 水町衣里, 八木絵香 (2018) 「萌芽的科学技术に関する公共的関与の実践・研究・教育の統合に向けて:『超スマート社会』を課題とした STiPS 大阪大学拠点の取り組み」, 『Co*Design』, 3: 35-53.

2) 2017 年度の成果を報告書にまとめました。

STiPS (2018) 『2017 年度 政策立案ワークショップ（宇宙）の記録』.

京大拠点プロジェクト

プロジェクト名

自治体の持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築

Visualizing the Health Information Held by Local Governments for the Policy Development

Considering Associated Ethical and Regulatory Issues

プロジェクト実施機関

代表拠点：京都大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、大阪大学

プロジェクト期間

2016（H28）年4月～2019（H31）年3月

2017年度プロジェクトメンバー

- ・川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）*研究代表者
- ・森田 朗（政策研究大学院大学 客員教授／SciREX センターPM, 国立社会保障問題研究 前所長／津田塾大学総合政策学部 教授）
- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- ・柴山 創太郎（Lund University, School of Economics and Management Senior Lecturer）
- ・吉田 都美（京都大学大学院医学研究科 特定助教）
- ・井出 和希（京都大学学際融合教育研究推進センター／京都大学大学院医学研究科 特定助教）

プロジェクト概要

ライフコースデータの構築に向けた学校健診情報のデータベース化とそれに伴う倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Implications; ELSI）へのアプローチにより市民・社会との相互理解を形成し、健康情報の利活用に向けた基盤を構築することを目的としています。

学校健診情報の電子化及び収集・活用することのできる基盤が形成され、ライフコースデータの構築やデータを活用した持続可能な健康・医療政策への第一歩となることが期待されます。小児期のBMIなどの健康状態は成人期の疾患リスクの予測につながることも報告されており、将来的な疾患の予防を通して健康水準の向上に寄与するだけでなく、成果は健康・医療政策の立案における重要な基礎資料として活用可能であるという意義があると考えています。

具体的な内容

- (1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化
- (2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化
- (3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

2017 年度の主たる研究成果

(1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化

2016 年度より引き続き、連携自治体の書面承諾を得て独自開発のソフトを用いたデータベース化を推進しています。2018 年 2 月時点で 67 自治体と取組を開始しています（図 1）。データベース化については、一次・二次利用に対応できるよう手順を確立し、進めています（図 2）。



図 1. 全国の連携自治体（赤点）



図 2. データベース化の手順

(2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化

生徒個人の健康レポート及び自治体向けの集計レポートを作成しました。作成後は、参加自治体の学校を介して生徒個人に無償で還元し、併せて、自治体担当者を介して集計レポートを還元しました（図 3 及び図 4）



図 3. 個人向け健康レポート



図 4. 自治体向け集計レポート

(3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

連携 7 自治体（49 中学校）の保護者を対象とした本事業に対する理解や認識の調査を遂行しました。2747 名が回答し、52%の保護者の子供の健康への関心が向上し、情報を接続した解析についても約 84%の保護者が理解を示していることを確認しました。

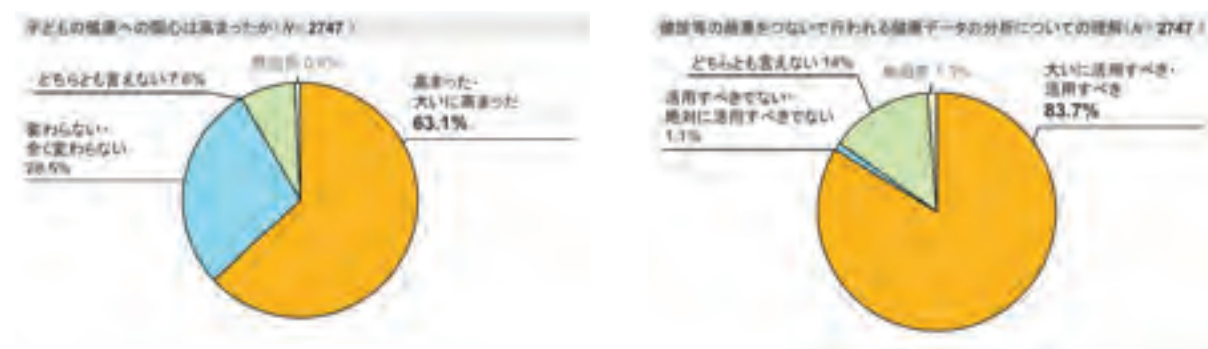


図 5. アンケート調査の結果（一部抜粋）

成果に係る発表及び報道

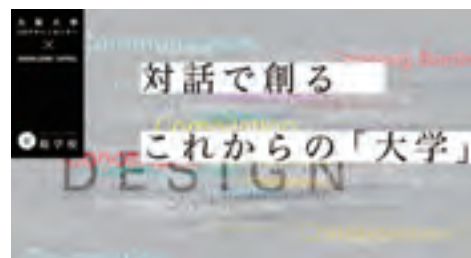
- 1) 2017 年 6 月に SciREX クォーターリー第 5 号にて本プロジェクト紹介及び進捗についてのアウトリーチを図りました。
- 2) 2017 年 11 月に本プロジェクトにおける成果「学校健診データの利活用に対する認識と理解：保護者を対象としたアンケート調査」（1 自治体対象の探索的調査）が学術誌『学校保健研究』に掲載されました。
- 3) 2017 年 11 月に本プロジェクトにおける成果「学校健診レポートの有用性と情報の利活用に対する理解：連携 7 自治体の保護者を対象としたアンケート調査」を日本学校保健学会 第 64 回学術大会（仙台）にて発表しました。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

🍷 ナレッジキャピタル超学校シリーズ

「ナレッジキャピタル超学校」は、大学や企業、研究機関などの様々な分野の研究者と一般参加者が一緒に考え、対話するプログラムです。2017年度は、大阪大学 C0 デザインセンターとナレッジキャピタルとが共同で開催するナレッジキャピタル超学校シリーズ「対話で創るこれからの『大学』」全3回を開催し、STiPSが共催しました。



以下、「対話で創るこれからの『大学』」シリーズの案内文です。

大阪大学 C0 デザインセンターがスタートして、この7月で1年になりました。

大学の中だけで閉じずに、社会の中の多様な人々と一緒に「知」の意味をとらえなおしたい。その上で、人をつなぎ、知識をつなぎながら、何かを創出する人材を育成したい。そんな新しい大学のあり方を探るべく、昨年よりナレッジキャピタル超学校へ参画してきました。

今回のシリーズでは、“とらえなおす”をテーマに「C0 デザインセンターの教員×社会の中で新しい価値を創り出している実践者」の対談を予定しています。

既存の価値を再定義するとは？

物事を適切にとらえなおすことができる人材とは？

そんなことを考える3回シリーズです。ぜひお越しください。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第1回

○タイトル：価値をわたしたちのものにする

○講師（対談する人）：大西 景子（BOX&NEEDLE 代表／ラーニングデザイナー）、ほんま なおき（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）

○コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）

○日時：2017 年 8 月 2 日（水）19:00～20:30

○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）

○定員：50 人

○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 C0 デザインセンター

○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、2017 年度のシリーズがスタートしました。

私たち C0 デザインセンターとしては、今回のシリーズを Season 3 と捉えています。Season1（2016 年度 第 1 回～第 4 回）は、分断した「知」をつなぎ、社会に実装する力「高度汎用力」とは何か、ということテーマにした対談（鼎談）をお送りしてきました。Season2（2016 年度 第 5 回～第 8 回）は、「高度汎用力」が社会で展開されている具体例として、社会の中で異なる分野・立場が持つ知恵や経験を「つなぐ」方法について考えました。今回の Season3（2017 年度 第 1 回～第 3 回）は、「とらえなおす」がテーマです。新しいモノ・コトをつくり出す一歩手前で、いまここにあるものをとらえなおすこと、を様々な領域の実践者をお招きしつつ考えていきます。

2017 年 8 月 2 日（水）に開催したのは Season 3 第 1 回「価値をわたしたちのものにする」。会場は、グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階にあるカフェラボです。この日は、52 人のみなさまにご参加いただきました。

今回お招きしたのは、貼箱ブランド「BOX&NEEDLE」の代表で、ラーニングデザイナーとしても活躍されている大西景子さんです。対談のお相手は、哲学者のほんまなおきさん（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）。哲学カフェなどの様々な対話の場をつくってきました。ほんまさんは、BOX&NEEDLE で購入したピンク色の扇子を持ってきました。

この日の対談は、扇子に貼られた BOX&NEEDLE オリジナルの友禅和紙についてのお話からスタートしました。1 時間弱の間に、いろいろな観点のお話が出てきたのでここに短くまとめるのはとても難しいのですが、参加者のみなさんが印象的だったと書いてくださった言葉をお借りしながら、その一部をご紹介します。

「モノを媒介してエピソードが、会話が、広がる。」

目の前に置かれた箱や紙があれば、「何を入れよう？」「どう生活の中に取り入れよう？」と具体的なイメージが広がります。目の前にあるものをみて、今感じていることから対話を始めることができます。



そんなモノを介した対話が、大西さんが普段されていること。一方、ほんまさんが取り組んでいらっしゃる対話の場で「箱」にあたるものは「質問」なのだそうです。例えば、病院の中で行われる患者さんの会合で行う哲学対話で問いかける質問は、「夏祭りの思い出って何ですか?」。患者さん同士が、「病気の人」としてではなくて「今まで生きてきた人」として語り合う・聴き合う場づくりをされているそうです。

「選択するという行為の中にその人の価値観が現れるということが面白いと思った。」

大西さんのお店を訪れるお客さんの中には、箱を選ぶために1時間以上もずーっと考えていらっしゃるような方々がいらっしゃるそうです。そうやって購入されたものは「商品」というよりも「生活の一部」「自分の一部」になっているのじゃないでしょうか、そして、選んだものによって、その人の振る舞いが変わるということもあるのじゃないかね、というお話がありました。

「箱と心、箱と人に共通点があるということ。」

対談終盤で、「箱って『中に入っているものが見えない』ということが一番大事で、一番ワクワクする。」と大西さんがお話しされたのを受けて、ほんまさんが、「それって、人の心も同じかもしれません。見えるようでみえてない。でも、そっと開かれることもある。」と発言されていました。複数の方がこのフレーズをアンケートに記入されていました。

「お二人のベースに流れるものがとても共通していた点」というコメントもありました。暑い夏の夜でしたが、さわやかな風のような対談でした。



ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第2回

○タイトル：価値をわたしたちのものにする

○講師（対談する人）：中台 澄之（ビジネスアーティスト／株式会社ナカダイ 常務取締役／モノ：ファクトリー 代表）、山崎 吾郎（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）

○コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）

○日時：2017 年 8 月 30 日（水）19:00～20:30

○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）

○定員：50 人

○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター

○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、2017 年度のシリーズ第 2 回目を、2017 年 8 月 30 日（水）に開催しました。この日のテーマは「あたりまえを疑って本質に迫る」。なんと 64 人ものみなさまにご参加いただきました。

今回対談をしたのは、中台澄之さん（株式会社ナカダイ 常務取締役、モノ：ファクトリー 代表。ビジネスアーティストという肩書きも！）と山崎吾郎さん（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）です。



2017 年度のナレッジキャピタル超学校シリーズ、全 3 回を通して考えてみたいテーマは「とらえなおす」です。どのような方をお招きしようかと企画を考えていた時に、中台澄之さんのお名前が頭に浮かびました。それは、廃棄物を「ゴミ」ではなく、「素材」として捉え直して、廃棄物処理業に新しい価値を持ち込んだ方だからです。

対する山崎さんは、文化人類学の研究者です。山崎さん曰く、そもそも人類学者とは「なじみのない世界にあえて浸ってみることで、あたりまえだと思っている世界観を揺さぶって、考えを豊かにしていく」人たち。そして、この人類学的なアプローチを、現在関わっている博士課程の学生を対象にした教育プログラム「超域イノベーション博士課程プログラム」でも活かしています。

お二人それぞれの自己紹介の後は、「既存の価値を見直す」「新しい価値を発見する」「課題を再定義する」といったことができる人材を育成するには？ということを経験した対談になりました。前回の開催レポートと同様、参加者のみなさんが印象的だったと書いてくださった言葉をお借りしながら、対談の一部をご紹介します。

「やらないリスク」

この言葉は多くの人のアンケート用紙に登場していた言葉でした。中台さんのお話の中で出てきたものです。中台さんは、「チャレンジをせずに、後で後悔するということだけはしたくない。失敗を恐れて行動を起こさないことこそ、最大のリスクと考えている」と自らの経験をもとに語りました。山崎さん

は「研究者も、おもしろいと思う『問い』を見つけたら、取り組まずにはられない人たち」と応じていました。新しい価値を生み出すための一つのキーワードは、この「まずはやってみる」ということにあるようです。

「事業者と教育者の交わる点、交わらない点」

「一見別の立場でありながら、つながることもあれば、考え方が違うこともある、というところを聞くことができて面白かった」というコメントなどもいただきました。

自己紹介の時間も含めて 90 分で語り尽くすのは、ちょっと難しかったかもしれません。これから先、今回いただいたご縁を、C0 デザインセンターでの教育や研究活動に活かしていきたいと考えています。



ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第3回

- タイトル：現場の枠を飛び越える：実践と政策のつなぎ方
- 講師（対談する人）：小川 勝章（作庭家・植治次期十二代／御庭植治株式会社 代表取締役）、平田 オリザ（大阪大学 C0 デザインセンター 特任教授／劇作家・演出家）
- コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）
- 日時：2017 年 10 月 5 日（木）19:00～20:30
- 場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）
- 定員：50 人
- 主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 C0 デザインセンター
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 10 月 5 日（木）、グランフロント大阪北館内のカフェラボにて、ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、2017 年度のシリーズ第 3 回を開催しました。今回は、申し込み受付が始まった直後に満席になってしまいました（参加を楽しみにしていたのに申し込みなかったという方、すみません）。当日は、62 人のみなさまにご参加いただきました。



今回は、代々「小川治兵衛」の名と志を襲名する家で育った作庭家の小川勝章さんを京都からお招きました。小川さんをお迎えするのは、劇作家・演出家の平田オリザさん。平田さんは、大阪大学 C0 デザインセンターでは、演劇を通じてコミュニケーションデザインのあり方や社会における芸術の役割を考える授業を担当しています。

第 3 回のタイトルは、『視座』を変えてみえる世界」としてみました。今回対談をするのは、作庭家と劇作家・演出家という全く違った世界で活躍されている方々ですが、どちらも、長い歴史の上に成り立つ芸術に関わるお二人という意味では少し共通するところがあるのかもしれません。そして、観る側の視線をどう設計するのかということについて、何か重なるところがあるのかもしれない、そんなことを考えながら、当日を迎えました。

お二人それぞれの自己紹介の後は、まずは平田さんから小川さんへの質問という形で対談がスタートしました。「まだ会ったことのない職業の人に会うと、劇作家としては、どうしてもその職業の仕組みや人間模様が聞きたくなってしまう」という平田さんによって、お庭に向き合う小川さんのお仕事の内容や人柄が引き出されていきました。

参加者のみなさんが記入してくださったアンケート用紙を眺めていると、「平田さんファンなので参加したけれど、お庭の話もとても面白く興味をもった」という方もいらっしゃる、小川さんを尊敬しているからきたけれど、演劇とロボットの話や人間が演じるということについての話が印象的だった」という方もいらっしゃいました。みなさんそれぞれがよい時間を過ごされていたのであれば、嬉しいです。

サイエンスカフェ@千里公民館

サイエンスカフェ@千里公民館 第13回

- タイトル：一歩先の未来をみんなで考える：新しいテクノロジーとの付き合い方
- 進行：八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）、水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- 日時：2017 年 9 月 5 日（木）10:00～11:30
- 場所：千里公民館 第3 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
- 定員：20 人程度
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

千里公民館では、平成 24（2012）年度以降、様々なテーマのサイエンスカフェが開催されてきました。今回、第 13 回目（9 月 5 日開催）と第 14 回目（10 月 3 日開催予定）は、STiPS も一緒に開催させていただくことになりました。第 13 回と第 14 回の 2 回のサイエンスカフェは、共通テーマを設けています。それは「ミライをつくる情報技術」。

第 13 回「一歩先の未来をみんなで考える：新しいテクノロジーとの付き合い方」は、参加者のみなさん同士で、いろいろな意見を出していただくという回。八木絵香准教授（大阪大学 C0 デザインセンター）、水町衣里特任助教（大阪大学 C0 デザインセンター）が進行役を務めました。参加者は、千里公民館の近くにお住まいの方など 9 人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）でした。

この日は、ちょっと変わった自己紹介から始めてみました。「サイエンスってどんな色だと思いますか？」この問いに答えてもらいつつ、お名前も伺いました。

今回のテーマ、顔認証技術を説明する時に使ったのは、顔認証技術についてストーリー仕立ててで説明されている絵本形式の資料（*昨年度から STiPS が開発してきた対話のための補助ツールです。他にもいろいろなテーマのものがあります）です。この資料に八木准教授が補足説明を加えつつ、みなさんに問いかけました。「この技術、どんないいことがあると思う？」「逆に、どんな不安があると思う？」テーブルごとに、付箋にメリットとデメリットを書き出し、それを A4 の紙にまとめながら、話を深めていきました。



サイエンスカフェ終了後、参加者のみなさんからは、こんな感想が寄せられました。「『テーマに対して各個人が考える』という形式が良かったと思います。」「モノゴトをいろんな視点でみられるということ、柔軟な考えが必要であるということが印象に残った。」

サイエンスカフェ@千里公民館 第14回

- タイトル：新しいテクノロジーのルールをつくる：安全と安心はどう確保されているのか
- 講師：岸本 充生（大阪大学データビリティフロンティア機構 教授）
- 進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
- 日時：2017 年 10 月 3 日（火）10:00～11:30
- 場所：千里公民館 第3 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
- 定員：20 人程度
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

第14回「新しいテクノロジーのルールをつくる：安全と安心はどう確保されているのか」は、前回みなさんが出してくださった意見なども踏まえつつ、岸本充生教授（大阪大学データビリティフロンティア機構）がお話をしました。参加者は、千里公民館の近くにお住まいの方など11人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）でした。

そもそも、私たちが日々使っているモノやサービスもそれが初めて世に出た時には、どれも「新しいテクノロジー」でした。シャープペンシルだって、腕時計だって、ATMだって。そして、どのモノやサービスも、既存の社会のルールとはうまく合わない部分があったはず。そんな昔の新技术について思いを馳せるところからスタートしました。例えば、電子レンジ。電子レンジが出始めた頃の新聞の見出しには「殺人光線の平和利用」などと書かれていたりしたそうです。また、取っ手をつかんで感電死する事故がおきて販売中止になったこともあったようです。他には、エレベーターも。エレベーターが導入された始めた頃は、エレベーターを操作できる人は資格をもった限られた人（エレベーターガールという職業があったりしました）だけ。自動運転が始まった時には、操作盤の前でどうしてよいか分からなくなる人が続出し、「利用上の心得」という新聞記事が掲載されたほか、様々な予期せぬ“事件”が起こったそうです。

参加者のみなさんには、「これまで生きてきた中で出会った『新しいテクノロジー』には、どんなものがありました？」という問いを一緒に考えていただきました。思いつく限り付箋に書き出して、壁に貼っていきます。これから出てくる「新しいテクノロジー」との上手な付き合い方を考える上でも、これまで社会が経験したことを整理することは大切そうです。

サイエンスカフェ終了後、アンケートにはこんな言葉が書かれていました。

「画一的なルール化を試みる際には、多くの市民間、そして多面的な専門分野の人々を巻き込んでの議論が必要と思いました。」→そうですね。顔認証技術をどこまで使ってもいいと思うか（プライバシーにどこまで踏み込んでいいのか、一度の間違いをどこまで許容するのか、など）という議論も、今回のサイエンスカフェで話題になりました。



サイエンスカフェ@千里公民館 第15回

- タイトル：本当に効く？ サプリメント：あなたに効いたら、わたしにも効く？
- 講師：大野 智（大阪大学大学院医学系研究科 准教授）
- 進行：八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）
- 日時：2017 年 12 月 12 日（火）10:00～12:00
- 場所：千里公民館 第1 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
- 定員：50 人程度
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017 年 12 月 12 日（火）、千里公民館において、サイエンスカフェ「本当に効く？ サプリメント：あなたに効いたら、わたしにも効く？」を開催しました。第13回、第14回に引き続き、今回の第15回サイエンスカフェも、千里公民館と STiPS が共同で開催しました。今回は、大野智准教授（大阪大学大学院医学系研究科）をゲストとしてお招きし、「本当に効く？ サプリメント：あなたに効いたら、わたしにも効く？」というタイトルでの開催でした。参加者は、54 人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）で、千里公民館の近くにお住まいの方だけではなく、豊中市外から足を運んでくださった方もいました。



前半は大野先生によるミニレクチャーでした。治療法やサプリメントなどの有効性を示すためには、「科学的根拠」が必要といわれるものの、そもそも、ここでいう“科学”って何？というお話から始まり、科学的根拠に基づいた医療とはどういうものなのかを分かりやすい例え話で説明していただきました。

後半は、大野先生のお話を受けて、参加者のみなさん同士でいろいろ考えてみる時間。八木絵香准教授（大阪大学 C0 デザインセンター）が進行役を務めました。大野先生のお話の最後に会場に投げかけられた質問「みなさんは、サプリメントを使う、もしくは、使っていますか？ それとも、使わないですか？」への回答を同じテーブルに座った人同士で共有するところから、グループ内での会話を始めてみました。

参加者同士で話すうちに、大野先生に聞きたい質問がいろいろ出てきました。「ずっと疑問だったのだけれど、薬とサブリの区分けって何でしょう？」、「サプリメントにはまっている妻をどう説得したらいいのでしょうか？」、「医薬品やサプリメントに関する知識がないと、どうしても知識がある人の判断が知りたくなってしまうんですけど・・・」。

最後は、その質問を会場全体で共有し、それぞれ大野先生に答えていただきました。

サイエンスカフェ終了後、参加者のみなさんからは、こんな感想が寄せられました。「人間の認識はバイアスがかかりやすい、ということを感じました。」、「「100%効くものも逆に効かないものもない」というのは大変腑におちました。自身の判断に責任をもとうと思いました。」

「講師の説明時間と会場からの議論が半々で、学ぶことが多かった。」



7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2017 年度には、以下の活動を行うことができました。

I) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation; RRI)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟について

近年の欧州連合 (EU) の科学技術イノベーション政策の柱の一つである「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に代表されるように、先進諸国では、科学技術の発展が社会に適切に埋め込まれるために必要な多様なアクターの相互作用のあり方に関する研究の進展が重視されています。こうした問題意識のもと、米国アリゾナ州立大学が「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」を構築しました。2014 年 6 月、本拠点 STiPS は、審査の上、同国際ネットワーク VIRI に正式に加盟が認められました。2018 年 3 月現在、欧州、アジア、南米、中東などの世界各地から 23 拠点が VIRI に加盟していますが、日本からは本拠点 STiPS のみが加盟しています (<https://cns.asu.edu/viri/partners>)。

II) InSPIRES プロジェクト アドバイザリーボードへ参加

欧州連合 (EU) のイノベーション推進施策である Horizon2020 の下で行われている公共的関与のプロジェクト「Ingenious Science shops to promote Participatory Innovation, Research and Equity in Science; InSPIRES」にアドバイザリーボードの一員として参加しています。

III) ミシガン大学との情報共有・意見交換

STiPS と関連の深い欧米の大学院プログラム、ミシガン大学の Science, Technology, and Public Policy (STPP) Graduate Certificate Program、及び Institute for Healthcare Policy and Innovation Clinician Scholars Program に、カール・ベッカー (京都大学 特任教授) が訪問し、それぞれのディレクターや院生指導者と面談して、科学的研究が政策に及ぼす影響について話し合いました。そして、今後の継続的な情報共有・意見交換を行っていくことについて合意しました。

海外調査及び発表等

2017 年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2017 年 4 月 27 日

カール・ベッカー (京都大学 特任教授) は、京都宝ヶ池国際会議場で行われた国際会議「32nd International Conference of Alzheimer's Disease International」にて、“Palliative Care as a Human

Right for People Living with Dementia（緩和医療は認知症患者の人権である）”と題した発表を行い、また、当会の座長を務めました。

2017年6月25日～7月1日

工藤充（大阪大学 特任助教）が、オーストラリア・ウロンゴン大学（University of Wollongong）で行われた Japanese Studies Association of Australia の年次大会に参加し、「Science communication glocalised」と題した口頭発表を行い、加えて、年次大会のトピックである「Debating Democracy in Japan」に関する情報収集や意見交換を行いました。

2017年9月24日～28日

平川秀幸（大阪大学 教授）が、イタリア・ローマで開催された国際会議「International Conference on Responsible Research and Innovation in Science, Innovation and Society 2017; RRI-SIS 2017」に参加し、意見交換を行いました。

2017年10月8日

カール・ベッカー（京都大学 特任教授）は、秋田県で開催された第41回日本死の臨床研究会年次大会の国際企画として、「日本人の時間感に見える死のケア」と題した発表を行いました。

2017年12月4日～7日

カール・ベッカー（京都大学 特任教授）は、香港大学社会科学学院にて、医療におけるバーンアウトや、コスト・パフォーマンスに関する講義を4日間にわたって行いました。

2018年2月13日～3月3日

工藤充（大阪大学 特任助教）が、オーストラリア・メルボルン大学（The University of Melbourne）で行われた学術研究大会「A Crisis of Expertise?」に参加し、政策形成への科学的助言に関する情報収集・意見交換を行いました。また、オーストラリア国立大学（The Australian National University）では「Promoting responsible innovation through public engagement within an evidence-based policymaking initiative in Japan」と題した研究セミナーを開催し、公共的関与についての意見交換を行いました。加えて、同大学やキャンベラ大学（University of Canberra）、オーストラリア政府などで公共的関与を行う実践者・研究者と面談し、公共的関与についての情報収集・意見交換を行いました。

2018年2月16日～22日

渡邊浩崇（大阪大学 特任准教授）が、宇宙政策や科学技術政策に関する教育・研究の打合せ及び資料・情報収集を目的として、欧州を訪問しました。パリではフランス宇宙機関（CNES）、国際連合教育科学文化機関（UNESCO）本部、宇宙航空研究開発機構（JAXA）パリ駐在員事務所、ウィーンでは国連宇宙部（UNOOSA）、欧州宇宙政策研究所（ESPI）を訪問して、フランスや欧州諸国の宇宙政策や科学技術政策の現状、今後の教育・研究における協力可能性等について意見交換を行うとともに、資料・情報収集を行いました。

2018年2月26日～3月7日

渡邊浩崇（大阪大学 特任准教授）が、宇宙政策や科学技術政策に関する資料・情報収集及び教育・研究の打合せを目的として、米国を訪問しました。ロサンゼルスではレーガン大統領図書館とカリフォルニア・サイエンス・センター、ボストンではケネディ大統領図書館、ニューヨークではイントレピッド海上航空宇宙博物館を訪問して資料・情報収集を行いました。また、ワシントンDCではジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策センター・宇宙政策研究所を訪問して、米国の宇宙政策や科学技術政策の現状、今後の教育・研究における協力可能性等について意見交換を行いました。

2018年3月6日～11日

平川秀幸（大阪大学 教授）、岸本充生（大阪大学 教授）、工藤充（大阪大学 特任助教）などが、イギリス・ロンドン大学（University College London）を訪問し、自動運転のELSIに関する国際共同研究に向けた意見交換を行いました。また、同大学が主催するワークショップ「Science, technology & public value: Beyond responsible innovation?」にも参加し、2日間の討論を通じて責任あるイノベーションに向けた取り組みについての情報収集や意見交換を行いました。

2018年3月11日～14日

平川秀幸（大阪大学 教授）がフランス・パリのパリ政治学院（Sciences Po）Medialabおよび放射線防護・原子力安全研究所（IRSN）と、Medialabでの科学技術論争の教育ツール、ならびに日本の福島第一原発事故後のリスクコミュニケーションに関する情報収集と意見交換を行いました。さらにOECD科学技術イノベーション局の研究者と萌芽的科学技術（とくにナノ・バイオのconverging technologies）のガバナンスについて意見交換を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2017 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 30 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- 平川秀幸. 2017. 「避難と不安の正当性——科学技術社会論からの考察」, 『法律時報』, 89(8) : 71-76, 2017 年 6 月. 寄稿
- 平川秀幸, 奈良由美子. 2018. 「第 1 章 リスクコミュニケーションとは」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 2 章 リスクコミュニケーションの類型」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 5 章 遺伝子組換え作物問題を通じて考えるリスクコミュニケーション (1) : 問題をどのようなフレーミングで理解すればよいか」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 6 章 遺伝子組換え作物問題を通じて考えるリスクコミュニケーション (2) : 全米アカデミー報告書に基づいて」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 7 章 放射線とリスクコミュニケーションの教訓 (1)」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 8 章 放射線とリスクコミュニケーションの教訓 (2)」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2018. 「第 14 章 リスクガバナンスへの展開」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 平川秀幸, 奈良由美子. 2018. 「第 15 章 対話・共考・協働 —よりよいリスクコミュニケーションにむけて—」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 松尾真紀子, 岸本充生. 2017. 「新興技術ガバナンスのための政策プロセスにおける手法・アプローチの横断的分析」, 『社会技術研究論文集』, 14: 84-94. 2017 年 6 月. 学術論文
- Kishimoto A. 2017. “Public attitudes and institutional changes in Japan following nuclear accidents,” Balleisen, E., Benneer, L., Krawiec, K. and Wiener, J. B. eds. “Policy Shock:

- Recalibrating Risk and Regulation after Oil Spills, Nuclear Accidents and Financial Crises, ” Cambridge University Press, 2017 年 11 月. 著書
- 藤井健吉, 河野真貴子, 井上知也, 平井祐介, 永井孝志, 小野恭子, 岸本充生, 村上道夫. 2017. 「レギュラトリーサイエンス (RS) のもつ解決志向性とリスク学の親和性—薬事分野・食品安全分野・化学物質管理分野の事例分析からの示唆—」, 『日本リスク研究学会誌』, 27 (1): 11-22. 2017 年 11 月. 総説論文
- Sugiyama M, Deguchi H, Ema A, Kishimoto A, Mori J, Shiroyama H, Scholz R W. 2017. “Unintended side effects of digital transition: perspectives of Japanese experts,” Sustainability 9(12): 2193. 2017 年 11 月. 学術論文
- Shineha R, Inoue Y, Ikka T, Kishimoto A, Yashiro Y. 2017. “Science communication in regenerative medicine: Implications for the role of academic society and science policy,” Regenerative Therapy 7: 89-97. 2017 年 12 月. 学術論文
- Shineha R, Inoue Y, Ikka T, Kishimoto A, Yashiro Y. 2018. “Comparative analysis of attitudes toward stem cell research and regenerative medicine between the public and the scientific community,” Stem Cells Translational Medicine, 7(2): 251-257. 2018 年 1 月. 学術論文
- 岸本充生. 2018. 「第 9 章 化学物質のリスクコミュニケーション」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 岸本充生. 2018. 「第 10 章 ナノテクノロジーのリスクコミュニケーション」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト 3.11 のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018 年 3 月. 著書
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 豊洲市場移転 人々の安心、信頼回復から」, 『朝日新聞』, 4 月 21 日朝刊, 2017 年 4 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 現代の「杞憂」 空から落ちてくるリスク」, 『朝日新聞』, 5 月 19 日朝刊, 2017 年 5 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) テロの「恐怖」の拡散 予防措置、正当化されやすく」, 『朝日新聞』, 6 月 16 日朝刊, 2017 年 6 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) ヒアリ対策 リスクの全体像、捉えよう」, 『朝日新聞』, 7 月 21 日, 朝刊, 2017 年 7 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(特集 豊洲問題と科学の真実) 私たちはどんな「卸売市場」が欲しいのか 「安全」についての誤解と「安心」についての誤解」, 『中央公論』, 131(7): 90-95, 2017 年 7 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 地球温暖化問題 検証の壁、挑み続ける科学者」, 『朝日新聞』, 8 月 18 日朝刊, 2017 年 8 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 「冷戦後」の終わり 時代の音色に耳を澄まして」, 『朝日新聞』, 9 月 15 日朝刊, 2017 年 9 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(図書紹介) 科学をめざす君たちへ: 変革と越境のための新たな教養」, 『情報管理』, 60(6): 453, 2017 年 9 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「Column4 原発に関する安全安心」, 津田大輔, 小嶋裕一 編『原発の教科書』新曜社, 158-159, 2017 年 9 月. 著書
- 神里達博. 2017. 「社会は科学や技術とどうつきあうか」, 『Journalism』, 2017. 10 no. 329: 12-18, 2017 年 10 月. 寄稿

- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) ICAN 平和賞と日本 世界的難題、取り組む勇気を」, 『朝日新聞』, 10月20日朝刊, 2017年10月. 寄稿
- 神里達博, 北野宏明, 伊勢田哲治. 2017. 「第4章 AIによって人類はどのように変化するのかー情報技術と生命操作技術の発展」, 川口淳一郎 監修『AI・ロボット・生命・宇宙… 科学技術のフロンティアがいま挑戦していること』秀和システム, 95-114, 2017年10月. 著書
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 相次ぐ品質検査の不祥事 ルールの精神、見つめ直せ」, 『朝日新聞』, 11月17日朝刊, 2017年11月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 地質学と「チバニアン」 大地から自然学ぶ機会に」, 『朝日新聞』, 12月15日朝刊, 2017年12月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞) 仮想通貨の理念と課題 多様な応用に、知の協働を」, 『朝日新聞』, 1月19日朝刊, 2018年1月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞) 高齢化社会の法医学 死因究明、人もカネも足りぬ」, 『朝日新聞』, 2月16日朝刊, 2018年2月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞) 裁量労働制の落とし穴 「長時間労働の美德」は古い」, 『朝日新聞』, 3月16日朝刊, 2018年3月. 寄稿
- 八木絵香, 水町衣里. 2017. 大阪大学 C0 デザインセンター 監修『対話で創るこれからの「大学」』大阪大学出版会, 2017年9月. 企画・編集
- 八木絵香. 2018. 「第13章 気候変動とリスクコミュニケーション」, 平川秀幸, 奈良由美子 編『リスクコミュニケーションの現在—ポスト3.11のガバナンス』放送大学教育振興会, 2018年3月. 著書
- 辻田俊哉. 2018. 「第5章 高等教育におけるソーシャル・イノベーション教育の展開可能性—誰かのためのデザイン (design for) から、誰かと共に創り出すデザイン (design with) に向けて」, 大阪大学大学院国際公共政策研究科稲盛財団寄附講座企画委員会 編『グローバルな公共倫理とソーシャル・イノベーション』金子書房, 65-75, 2018年3月. 著書
- 工藤充, 水町衣里, 八木絵香. 2018. 「萌芽的科学技術に関する公共的関与の実践・研究・教育の統合に向けて:「超スマート社会」を課題とした STiPS 大阪大学拠点の取り組み」, 『Co*Design』, 3: 35-53. 2018年3月. レポート (報告)
- 菅万希子, 鈴木紀子, 藤原靖也, 吉澤剛, 工藤充, 加納圭. 2017. 「国民参画型科学技術イノベーション政策形成に向けたセグメンテーションの開発:科学技術イノベーション政策に関する世論調査をもとに」, 『科学技術コミュニケーション』, 22: 3-13, 2017年12月. 学術論文
- 加納圭, 一方井祐子, 水町衣里. 2017. 「高校生を対象とした研究体験で獲得される科学的知識とその限界-PISA 調査の評価枠組みを活用した分析-」, 『科学教育研究』, 41(2): 107-115, 2017年7月. 学術論文
- 菅原裕輝. 2017. 「オーサーシップ概念の再考」, 『フィロソフィア・イワテ (岩手哲学会)』, 48: 29-38, 2017年1月. 寄稿
- 菅原裕輝. 2017. 「米国の人文系大学院のカリキュラム分析」, 『大学教育における分野別質保証の在り方に関する調査研究 報告書 (大学改革支援・学位授与機構)』, 87-96, 2017年7月. 報告書
- 菅原裕輝, 松井健. 2017. 「誰をオーサーにするべきか?:「オリジナリティー」の分野特性を考慮した自律的オーサーシップの提案」, 『科学技術社会論研究』, 14: 77-89, 2017年11月. 短報

学会発表など

- Hirakawa H, Shirabe M. 2016. “Politics in Risk Discourse on Radioactive Risks in Japan (Case Studies for Responsible Innovation: Lessons from Fukushima 内),” 4s/EASST Conference Barcelona 2016 (Barcelona International Convention Centre, Barcelona, Spain), 2016 年 9 月 3 日. 口頭発表
- Hirakawa H. 2017. “Competing Ways of Framing the Problem of Voluntary Evacuation from Fukushima,” 国際シンポジウム「科学と民主主義、そして専門家の役割」(東京工業大学大 岡山キャンパス), 2017 年 3 月 3 日. 口頭発表
- 岸本充生. 2017. 「デジタルトランスフォーメーション」, 日本リスク研究学会第 30 回年次大会シンポジウム「リスクを取り巻く環境変化とリスク学の課題」(滋賀大学), 2017 年 10 月 28 日. パネリスト
- 岸本充生. 2017. 「スポーツ対決: 野球 vs. サッカー」, 日本リスク研究学会第 30 回年次大会企画セッション「リスク対決」(滋賀大学), 2017 年 10 月 28 日. 口頭発表
- 岸本充生. 2017. 「「今年リスク」タスクグループからの報告: 2017 年のリスク」, 日本リスク研究学会第 30 回年次大会 (滋賀大学), 2017 年 10 月 29 日. ポスター発表
- 岸本充生. 2017. 「エマージングリスクの早期発見と対応に関する取り組み」, 日本リスク研究学会第 30 回年次大会の日本保険学会・日本リスク研究学会共同セッション (滋賀大学), 2017 年 10 月 29 日. パネリスト
- 神里達博. 2017. セッション「科学の不定性と社会: 現代の科学リテラシーとは」, 科学技術社会論学会第 16 回年次研究大会 (九州大学 馬出キャンパス), 2017 年 11 月 26 日. 指定討論者
- 神里達博. 2018. 「食とリスクの問題と科学技術社会論からのコメント」(理事会セッション「福島復興に向けた『風評被害』への対応」内), 日本原子力学会 2018 年春の年会 (大阪大学 吹田市キャンパス), 2018 年 3 月 26 日. 口頭発表
- 八木絵香, 北村正晴. 2017. 「高レベル放射性廃棄物処分問題に関する論点整理 ―主張の異なる論者による対話を手がかりとして―」, 科学技術社会論学会第 16 回年次研究大会 (九州大学 馬出キャンパス), 2017 年 11 月 26 日. 口頭発表
- 八木絵香. 2017. 「原子力コミュニケーションにおける「やらせ」の何が問題なのか」, 第四回高レベル放射性廃棄物処分研究連絡会 (名古屋大学野依記念ホール), 2017 年 12 月 8 日. 口頭発表
- 柏貴子, 八木絵香. 2018. 「原子力発電所「近接」県における原子力災害リスクコミュニケーション: (3)平成 29 年度滋賀県リスクコミュニケーション研修会を事例として」, 日本原子力学会 2018 年春の年会 (大阪大学 吹田市キャンパス), 2018 年 3 月 27 日. 口頭発表
- 八木絵香, 北村正晴, 高橋信, 狩川大輔. 2018. 「サービスサイエンスの視点からの原子力対話場の設計(3): 高レベル放射性廃棄物に関する情報提供資料作成プロセスを題材として」, 日本原子力学会 2018 年春の年会 (大阪大学 吹田市キャンパス), 2018 年 3 月 27 日. 口頭発表
- Tsujita, T. 2017. “Social Design and Entrepreneurship: Challenges and Opportunities in Japan,” International Symposium on Social Entrepreneurship in Israel and Japan (政策研究大学院大学), 2017 年 11 月 15 日. 口頭発表
- Tsujita, T. 2017. “Cultivating Social Innovation in Higher Education: The Case of ‘Social Design’ Program,” EAST ASIA Social Innovator Forum: ‘How do Social Innovators grow?’ (The Circle Foundation, Seoul, Korea), 2017 年 12 月 7 日. 招待講演

- 渡邊浩崇. 2017. “The Space Policy of the Carter Administration: A Reconstruction of National Space Policy in the Cold War,” 31st International Symposium on Space Technology and Science (ISTS) (松山市, ひめぎんホール), 2017 年 6 月 6 日. 口頭発表
- 渡邊浩崇. 2017. 「日本の有人宇宙計画の歴史—スペースシャトルから国際宇宙ステーションへ—」, 第 61 回宇宙科学技術連合講演会 (新潟市, 朱鷺メッセ), 2017 年 10 月 27 日. 口頭発表
- 渡邊浩崇. 2017. 「宇宙の歴史 2—宇宙政策史、宇宙法制史、宇宙科学技術史、宇宙産業史—」, 第 61 回宇宙科学技術連合講演会 (新潟市, 朱鷺メッセ), 2017 年 10 月 26 日, 27 日. 企画・司会
- Kudo M. 2017. “Science communication glocalised: examining how the Western science communication discourse on citizen participation has been incorporated into Japanese science policy,” The 2017 Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia (University of Wollongong, Australia), 2017 年 6 月 28 日. 口頭発表
- 水町衣里, 一方井祐子, 加納圭. 2017. 「高校生を対象とした研究体験で獲得される科学的知識とその限界-PISA の評価枠組みを活用した分析—」, 日本科学教育学会第 41 回年会 (高松市, サンポート高松), 2017 年 8 月 29 日. 口頭発表
- 加納圭, 土井祐磨, 後藤崇志, 水町衣里, 一方井祐子. 2017. 「科学的なものの見方の習得に関する評価の試行—NHK E テレ「カガクノミカタ」連動ワークショップを事例に—」, 日本科学教育学会第 41 回年会 (高松市, サンポート高松), 2017 年 8 月 29 日. 口頭発表
- 塩瀬隆之, 水町衣里, 加納圭. 2017. 「教室におけるアクティブラーニング評価手法に関する教師の懸念」, 日本科学教育学会第 41 回年会 (高松市, サンポート高松), 2017 年 8 月 29 日. 口頭発表

講演会、展示会などのアウトリーチ活動

- 小林傳司. 2017. 開会挨拶, C0 デザインセンター共創イノベーションセミナーシリーズ「地域イノベーションの共創: ドイツの事例から考える」(グランフロント大阪 ナレッジキャピタルカンファレンスルーム (RoomC03)), 2017 年 6 月 6 日.
- 小林傳司. 2017. 話題提供, 第 7 回学術政策セミナー「社会から共感を得る大学となるために」(大阪大学吹田キャンパス サイバーメディアコモンズ), 2017 年 7 月 11 日.
- 小林傳司. 2017. 対談録, 「第 1 楽章 1 社会の「公器」としての大学」, 大阪大学 C0 デザインセンター監修『対話で創るこれからの「大学」』大阪大学出版会, 2017 年 9 月.
- 小林傳司. 2017. 開会挨拶, C0 デザインセンター共創イノベーションセミナーシリーズ「科学技術基本計画 (1995-2016) のその後」(大阪大学豊中キャンパス スチューデントコモンズ カルチエ・ミューラルチング), 2017 年 9 月 27 日.
- 小林傳司. 2017. 登壇者, 京都大学アカデミックデイ 2017 内 お茶を片手に座談会「研究者の本音、メディアの事情、市民の視線 ～科学記事をめぐる 3 者協議～」(京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館), 2017 年 9 月 30 日.
- 小林傳司. 2017. 講演, 「社会的合意形成、リスクコミュニケーションのあり方」, 保物セミナー 2017 (大阪科学技術センター), 2017 年 11 月 1 日.
- 小林傳司. 2017. 開会挨拶, 大阪大学グローバルイニシアティブ・センター公開講演会「How good are Japan's research universities in global terms, and how much does it matter?」(大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター), 2017 年 11 月 16 日.

- 小林傳司. 2017. コメント掲載, 「クローズアップ 2017 「スパコン超え」国産コンピューター 「量子」命名に異論 集積回路、従来のまま」, 『毎日新聞』, 12月10日朝刊, 2017年12月.
- 小林傳司. 2017. 講演, 「大学を出てからの方が長い」, これからの時代をどう生きるかー教養学部生のキャリアセミナーⅠ (東京大学 教養学部附属 教養教育高度化機構), 2017年12月15日.
- 小林傳司. 2018. 閉会挨拶, 大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムシンポジウム「オールラウンド型博士人材育成の“今”と“これから”」(グランフロント大阪 ナレッジキャピタル カンファレンスルーム), 2018年1月15日.
- 小林傳司. 2018. パネリスト, 学びみらいフェスタ in 大阪南キャンパス(大阪国際交流センター), 2018年1月28日.
- 平川秀幸. 2017. 講師, WIRED Business Bootcamp2017 本課程「WIREDの哲学講座」(デジタルハリウッド駿河台キャンパス), 2017年7月13日.
- 平川秀幸. 2017. 発表者, 第6回 SciREX 交流研究会 (東京大学本郷キャンパス), 2017年9月29日.
- 平川秀幸. 2017. 講師, とよなか地域創生塾 (とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ (豊中市)), 2017年10月28日.
- 平川秀幸. 2017. 講師, 「科学技術イノベーションにおける包摂的ガバナンスの意義〜リスクガバナンスを中心に」, 2017年度文部科学省・科学技術イノベーション政策研修, 第4講「科学技術イノベーションのガバナンスと社会との関係」(政策科学研究大学院大学), 2017年11月8日.
- 平川秀幸. 2018. パネリスト, 「共創型人材の育成と未来企業の実現」シンポジウム&WS (関西大学梅田キャンパス), 2018年2月27日.
- 岸本充生. 2017. インタビュー掲載, 「安全は、科学だけでは決まらない」, 『原子力文化』, 2017年6月号, 2017年6月.
- 岸本充生. 2017. 企画・講演, 「顔認証技術とスマートシティ」, 日本リスク研究学会第30回シンポジウム「社会は新規技術のリスクにどう対応すべきか: 事例から学ぶ」(東京大学医学部2号館3階大講堂), 2017年6月29日.
- 岸本充生. 2017. 講演, 「安全とリスクの考え方〜新しいものにどう向き合うか〜」, 日本再生医療学会市民夏シンポジウム「再生医療・遺伝子治療についてかんがえる〜先端医療のリスクとベネフィットを知ろう〜」(秋葉原UDX 6階), 2017年7月15日.
- 岸本充生. 2017. 講演, 「レギュラトリーサイエンス・コミュニケーション」, サイエンスコミュニケーション協会第3回定例会・第1回研究発表会 (筑波大学茗荷谷校舎), 2017年8月20日.
- 岸本充生. 2017. 講演, 「食品安全分野のリスク評価・管理のこれまでとこれから」, 120回食用加工油脂技術研究会 (大阪リバーサイドホテル), 2017年9月29日.
- 岸本充生. 2017. 講師, サイエンスカフェ@千里公民館「新しいテクノロジーのルールをつくる: 安全と安心はどう確保されているのか」(豊中市, 千里公民館), 2017年10月3日.
- 岸本充生. 2017. 講演, 「レギュラトリーサイエンスコミュニケーション」, 原子力規制庁平成29年度リスクコミュニケーション研修 (原子力規制委員会 原子力安全研修所), 2017年10月12日.
- 岸本充生. 2017. 講師, 「科学技術イノベーションにおける包摂的ガバナンスの意義〜リスクガバナンスを中心に」, 2017年度文部科学省・科学技術イノベーション政策研修, 第4講「科学技術イノベーションのガバナンスと社会との関係」(政策科学研究大学院大学), 2017年11月8日.

- 岸本充生. 2017. 講演, 「新しい技術にどう向き合うか〜安全とリスクの考え方〜」, 日本再生医療学会市民シンポジウム「再生医療・遺伝子治療についてかんがえる〜先端医療のリスクとベネフィットを知らう〜」(新大阪ブリックビル), 2017年12月3日.
- 岸本充生. 2018. 講演, “Gap Between Science and Policy in Setting Environmental Standards in Japan,” Rethinking Regulation Seminar (Duke University), 2018年1月29日.
- 岸本充生. 2018. パネリスト, 電力中央研究所主催「原子力リスク研究センターシンポジウム2018」(有楽町朝日ホール), 2018年2月8日.
- 岸本充生. 2018. 講演, 「新しい技術のリスクにどう向き合うか、社会はどう対処してきたか」, 第17回日本再生医療学会総会(パシフィコ横浜), 2018年3月23日.
- 岸本充生. 2018. 講演, 「リスクに対する主観的判断と客観的評価: バイアス、ナッジ、費用便益分析」, リスク学市民講座2018「社会における多様なリスクにどう向き合うか」(大阪大学中之島センター), 2018年3月24日.
- 岸本充生. 2018. 講演, 「安全とリスクの考え方」, 第17回日本再生医療学会総会市民公開講「まだ見ぬ時代の創り方」の第1部「リスクについて考えよう」(東京大学安田講堂), 2018年3月25日.
- 神里達博. 2017. コメント掲載, 「棋界、AIに完敗の衝撃 シンギュラリティは実社会に訪れるのか」, 『朝日新聞』, 6月16日 朝刊, 2017年6月16日.
- 神里達博. 2017. 対談録, 「(論点争点) 千葉大学 国際教養学部 教授 神里達博氏×食の安全と安心を科学する会 理事長 山崎毅氏 豊洲市場移転議論の教訓 市民不在が信頼損ねる 問われる「専門家」の役割」, 『日経エコロジー』, 219: 46-49, 2017年9月.
- 神里達博. 2017. 対談録, 「第2楽章4 つながり进行研究する: 「つなぐ人」がもたらす価値」, 大阪大学C0デザインセンター 監修『対話で創るこれからの「大学」』大阪大学出版会, 2017年9月.
- 八木絵香. 2017. 企画・コーディネーター(聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学C0デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第1回「価値をわたしたちのものにする」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年8月2日.
- 八木絵香. 2017. 企画・コーディネーター(聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学C0デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第2回「あたりまえを疑って本質に迫る」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年8月30日.
- 八木絵香. 2017. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「一歩先の未来をみんなで考える: 新しいテクノロジーとの付き合い方」(豊中市, 千里公民館), 2017年9月5日.
- 八木絵香. 2017. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「新しいテクノロジーのルールをつくる: 安全と安心はどう確保されているのか」(豊中市, 千里公民館), 2017年10月3日.
- 八木絵香. 2017. 企画・コーディネーター(聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学C0デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第3回『視座』を変えてみえる世界」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年10月5日.
- 八木絵香. 2017. コーディネーター, 大阪府食の安全安心シンポジウム「ほんまはどやねん? これからどうなる? 遺伝子組み換え食品」(大阪市, 大阪府庁新別館), 2017年10月20日.
- 八木絵香. 2017. コメント掲載, 「国民の理解どう得る 対話の在り方模索」, 『新潟日報』, 10月1日朝刊, 2017年10月1日.
- 八木絵香. 2017. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「本当に効く? サプリメント: あなたに効いたら、わたしにも効く?」(豊中市, 千里公民館), 2017年12月12日.

- 八木絵香. 2018. コーディネーター, 滋賀県「リスクコミュニケーション研修会」(滋賀県危機管理センター), 2018年1月26日.
- 八木絵香. 2018. コーディネーター, 滋賀県「原子力防災講演会 パネルディスカッション・原子力災害時に不安に思うこと」(滋賀県危機管理センター), 2018年1月27日.
- 辻田俊哉. 2017. メディア掲載, 「挑む! 大阪大学講師 辻田俊哉さん『困りごと 解決手法を学ぶ』, 『朝日新聞』4月8日夕刊, 2017年4月8日.
- Tsujita, T. 2017. 進行, 短期海外教育プログラム説明会 Experience a Life Changing Summer! Silicon Valley | Stanford University (大阪大学), 2017年4月24日, 25日.
- Tsujita, T. 2017. 進行, Workshop Series: Entrepreneurship and Social Change (大阪大学), 2017年5月11日, 5月25日, 6月1日.
- 辻田俊哉. 2017. メディア掲載, 「トランプ米大統領 中東訪問 辻田俊哉・大阪大学講師の話『対イラン結束確認』, 『毎日新聞』, 5月24日夕刊, 2017年5月24日.
- 辻田俊哉. 2017. プレゼンター, WAKAZO.OFFLINE @Osaka University (大阪大学会館 アセンブリーホール), 2017年5月28日.
- Tsujita, T. 2017. 進行, International Meeting on “Security and Resilience in the Middle East” (大阪大学), 2017年10月4日.
- 辻田俊哉. 2017. 進行, 学生説明会 VIA (Volunteers in Asia) による短期海外教育プログラム—シリコンバレーで最先端の社会イノベーションを学ぶ2週間! (大阪大学), 2017年11月9日.
- 辻田俊哉. 2017. 講演者, 国際シンポジウム “International Symposium on Social Entrepreneurship in Israel and Japan” (政策研究大学院大学), 2017年11月15日.
- Tsujita, T. 2017. 進行, International Workshop Proposal “The Rise and Rise of Social Entrepreneurship” (グロービス経営大学院 東京校), 2017年11月17日.
- Tsujita, T. 2017. 進行, Social Entrepreneurship Workshop Series: Change Osaka Challenge (COC) 2017 (大阪市, VisLab OSAKA), 2017年12月16日.
- 辻田俊哉. 2018. 講師, 大阪大学 CO デザインセンター新任教員研修プログラム (社会学連携能力開発プログラム) 社会学連携の取組のあり方について (大阪大学), 2018年1月16日.
- 辻田俊哉. 2018. 企画, 地域共創のこれから—地域とつながり、地域と生きる (大阪市, 株式会社岡村製作所関西支社内 Open Innovation Biotope “bee”), 2018年3月26日.
- 渡邊浩崇. 2017. 企画・司会, 政策立案ワークショップ (宇宙) 第1回 (東京都, エキスパート倶楽部), 2017年7月14日.
- 渡邊浩崇. 2017. 企画・司会, 政策立案ワークショップ (宇宙) 第2回 (東京都, 霞が関ナレッジスクエア スタジオ), 2017年7月28日.
- 渡邊浩崇. 2017. 企画・司会, 政策立案ワークショップ (宇宙) 研究評価会 (東京都, エキスパート倶楽部), 2017年9月8日.
- 渡邊浩崇. 2017. コメンテーター, ワークショップ「宇宙探査・開発・利用の倫理的・法的・社会的含意について考える」(京都大学), 2017年9月23日.
- 渡邊浩崇. 2018. 企画・話題提供, ワークショップ「宇宙政策の未来についてみんなで考える」(福岡市科学館), 2018年1月27日.
- 工藤充. 2017. 講演『「政策のための科学」と専門知コミュニケーション」, STS Network Japan 夏の学校 (長野県大町温泉郷森林劇場・多目的ホール), 2017年9月14日.

- 工藤充. 2018. セミナー発表, “Promoting responsible innovation through public engagement within an evidence-based policy-making initiative in Japan,” The Australian National Centre for the Public Awareness of Science, 2018年2月21日.
- 水町衣里. 2017. 企画, ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第1回「価値をわたしたちのものにする」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年8月2日.
- 水町衣里. 2017. 企画, ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第2回「あたりまえを疑って本質に迫る」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年8月30日.
- 水町衣里. 2017. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「一歩先の未来をみんなで考える: 新しいテクノロジーとの付き合い方」(豊中市, 千里公民館), 2017年9月5日.
- 水町衣里. 2017. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「新しいテクノロジーのルールをつくる: 安全と安心はどう確保されているのか」(豊中市, 千里公民館), 2017年10月3日.
- 水町衣里. 2017. 企画, ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第3回『『視座』を変えてみえる世界』(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年10月5日.
- 水町衣里. 2017. 企画・司会, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2017 SUMMER: NHK E テレ NHK E テレ『カガクノミカタ』連動ワークショップ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年7月30日.
- 水町衣里. 2017. 企画・司会, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2017AUTUMN: NHK E テレ NHK E テレ『カガクノミカタ』連動ワークショップ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年11月19日.
- 水町衣里. 2017. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「本当に効く? サプリメント: あなたに効いたら、わたしにも効く?」(豊中市, 千里公民館), 2017年12月12日.
- 水町衣里. 2018. 運営サポート, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2018SPRING: NHK E テレ NHK E テレ『カガクノミカタ』連動ワークショップ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2017年3月24日.
- 菅原裕輝. 2017. 企画・司会, CO デザインカフェ「超スマート社会に潜むワナ?」, 2017年6月12日.
- 菅原裕輝. 2017. 書評執筆・映像出演, ブックコレクション ～教員 VS 学生【書評対決】～, 2017年8-9月.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Ide K, Yonekura H, Kawasaki Y, Kawakami K. 2017. “Influence of institution-based factors on preoperative blood testing prior to low risk surgery: a Bayesian generalized linear mixed approach, ” Computational and Mathematical Methods in Medicine, 2017:3624075, 2017年. 学術論文
- Calistus W, Yoshida S, Blangiardo M, Betran AP, Tanaka S, Kawakami K. 2017. “Caesarean delivery and anaemia risk in children in 45 low- and middle-income countries: propensity-score weighting and meta-analysis of national survey data,” Maternal & Child Nutrition, e12538, 2017年. 学術論文
- Song L, Yoshida S, Tanaka-Mizuno S, Ogawa Y, Furukawa TA, Kawakami K. 2017. “Association between eicosapentaenoic acid (EPA) medication intake and new onset of depression among patients with hyperlipidemia: a 3-year follow-up study,” Journal of Nutrition & Intermediary Metabolism, 9:12-16, 2017年. 学術論文
- Kinoshita T, Tokumasu H, Tanaka S, Kramer A, Kawakami K. 2017. “Policy implementation for methicillin-resistant Staphylococcus aureus in seven European countries: a comparative analysis from 1999 to 2015,” Journal of Market Access & Health Policy, 5(1):1351293, 2017年. 学術論文
- Hálfðánarson Ó, Zoëga H, Aagaard L, Bernardo M, Brandt L, Fusté AC, Furu K, Garuoliené K, Hoffmann F, Huybrechts KF, Kalverdijs LJ, Kawakami K, Kieler H, Kinoshita T, Litchfield M, López SC, Machado-Alba JE, Machado-Duquw ME, Mahesri M, Nishtala PS, Pearson S, Reutfors J, Saastamoinen LK, Sato I, Schuiling-Veninga CCM, Shyu YC, Skurtveit S, Verdoux H, Wang LJ, Bachmann CYCJ. 2017. “Large variety in antipsychotic utilisation in children, adults, and older adults in 16 countries worldwide,” European Neuropsychopharmacology, 27(10):1064-1076, 2017年. 学術論文
- Kimura T, Takeuchi M, Imai T, Tanaka S, Kawakami K, 2017. Neonatal Research Network of Japan. “Vaginal versus cesarean delivery for neurodevelopment at 3 years in neonates born at <26 weeks of gestation: retrospective analysis of a nationwide registry in Japan,” Neonatology, 112:258-266, 2017年. 学術論文
- Hiroi S, Sugano K, Tanaka S, Kawakami K. 2017. “Impact of health insurance coverage for Helicobacter pylori gastritis on the trends in eradication therapy in Japan: retrospective observational study and simulation study based on real-world data,” BMJ Open, 7:e015855, 2017年. 学術論文
- Kanazawa Y, Takeuchi M, Tateya I, Omori K, Kawakami K. 2017. “Clinical epidemiology of tracheal invasion from thyroid cancer in Japanese population study – functional outcomes and impact of aging,” Journal of Cancer Epidemiology, 50:107-112, 2017年. 学術論文
- Imai T, Tanaka S, Kawakami K, Miyazaki T, Hagino H, Shiraki M, for the A-TOP (Adequate Treatment of Osteoporosis) research group. 2017. “Health state utility values and patients reported

- outcomes before and after vertebral and non-vertebral fractures in an osteoporosis clinical trial,” *Osteoporosis International*, DOI 10.1007/s00198-017-3966-7, 2017 年. 学術論文
- Sato I, Onishi H, Yamada S, Kawakami K. 2017. “Prevalence and initial prescription of psychotropics in patients with common cancers in Japan, based on a nationwide health insurance claims database,” *Psycho-Oncology*, DOI: 10.1002/pon.4511, 2017 年. 学術論文
- Kochi K, Sato I, Nishiyama C, Tanaka-Mizuno S, Doi Y, Arai M, Fujii Y, Matsunaga T, Ogawa Y, Furukawa TA, Kawakami K. 2017. “Trends in antipsychotic prescriptions for Japanese outpatients during 2006-2012: a descriptive epidemiological study,” *Pharmacoeconomics and Drug Safety*, 26:642-656, 2017 年. 学術論文
- Kadohara K, Sato I, Kawakami K. 2017. “Diabetes mellitus and risk of early-onset Alzheimer’s disease: A population-based case-control study,” *European Journal of Neurology*, 24:944-949, 2017 年. 学術論文
- Pathy NTB, Inaida S, Tanaka S, Taib NA, Yip CH, Saad M, Kawakami K. 2017. “Impact of adjuvant chemotherapy on survival of women with T1M0N0, hormone receptor negative breast cancer,” *Cancer Epidemiology*, 48:56-61, 2017 年. 学術論文
- Bachmann CJ, Aagaard L, Abajo FJ, Bernardo M, Brandt L, Cartabia M, Clavenna A, Fusté AC, Furu K, Garuoliené K, Hoffmann F, Hollingworth S, Huybrechts K, Kalverdijs LJ, Kawakami K, Kieler H, Kinoshita T, López SC, Machado-Alba JE, Machado-Duque ME, Mahesri M, Montero D, Nishtala P, Piovani D, Reutfors J, Saastamoinen LK, Sato I, Schuiling-Veninga CCM, Shyu YC, Siskind D, Skurtveit S, Verdoux H, Wang LJ, Yahni CZ, Taylor HZD. 2017. “International trends in clozapine use: A study in 17 countries, 2005-2014,” *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 136(1):37-51, 2017 年. 学術論文
- 川上浩司. 2017. 「臨床で生きるビッグデータの未来」, 日慢協リレーインタビュー第 21 回, 『日本慢性期医療協会誌』, 112:45-52, 2017 年 8 月. 寄稿論文
- 川上浩司. 2017. 「ライフコース・ヘルスケアの基盤整備のための学校健診情報、母子保健情報のデータベース構築」, 『医薬ジャーナル』, 53(9):107-111. 寄稿論文
- 川上浩司. 2017. 「安全性評価から臨床評価、健康福祉社会へと展開するリアルワールドデータと薬剤疫学」. 『大阪医薬品協会会報』, 第 819 号, 2017 年 4 月. 寄稿論文
- 川上浩司. 2017. 「医療、社会の変化に対応して、リアルワールドデータが切り拓く新たな薬剤疫学」, 『薬剤疫学』, 22(1):37-43, 2017. 寄稿論文
- Ide K, Matsuoka N, Kawakami K. 2018. “Is the use of proton-pump inhibitors a risk factor for Alzheimer’s disease? Molecular mechanisms and clinical implications,” *Current Medicinal Chemistry*, in press. 学術論文
- Yonekura H, Ide K, Seto K, Kawasaki Y, Tanaka S, Nahara I, Takeda C, Kawakami K. 2018. “Preoperative blood tests conducted prior to low-risk surgery in Japan: a retrospective cohort study using a claims database,” *Journal of Anesthesia*, in press. 学術論文
- Yonekura H, Seto K, Ide K, Kawasaki Y, Tanaka S, Nahara I, Takeda C, Kawakami K. 2018. “Preoperative blood tests conducted before low-risk surgery in Japan: a retrospective observational study using a nationwide insurance claims database,” *Anesthesia and Analgesia*, in press. 学術論文

- Miyamoto Y, Shinzawa M, Tanaka S, Tanaka-Mizuno S, Kawakami K. 2018. “Perioperative steroid use for tonsillectomy and its association with reoperation for post-tonsillectomy hemorrhage: a retrospective cohort study,” *Anesthesia & Analgesia*, in press. 学術論文
- Yoshida S, Calistus W, Kimura T, Takeuchi M, Kawakami K. 2018. “Prenatal alcohol exposure and suspected hearing impairment among children: a population-based retrospective cohort study,” *Alcohol and Alcoholism*, in press. 学術論文
- Minoura T, Takeuchi M, Morita T, Kawakami K. 2018. “Practice patterns of medications for patients with malignant bowel obstruction using a nationwide claims database and the association between treatment outcomes and concomitant use of H2-blockers/proton pump inhibitors and corticosteroids with octreotide,” *Journal of Pain and Symptom Management*. in press. 学術論文
- Iwasaku M, Shinzawa M, Tanaka S, Kimachi K, Kawakami K. 2018. “Clinical characteristics of adrenal crisis in adult population with and without predisposing chronic adrenal insufficiency: a retrospective cohort study,” *BMC Endocrine Disorders*, in press. 学術論文
- Chen H, Shinzawa M, Tokumasu H, Tanaka S, Kawakami K. 2018. “Short sleep and risk of proteinuria in 3-year-olds in Japan: a population-based cohort study,” *Sleep Medicine*, in press. 学術論文
- Takeuchi M, Kawamura T, Sato I, Kawakami K. 2018. “Population-based incidence of diabetic ketoacidosis in type 2 diabetes: medical claims data analysis in Japan,” *Pharmacoepidemiology and Drug Safety*, in press. 学術論文
- Yoshida S, Takeuchi M, Kawakami K. 2018. “Prescription of antibiotics to pre-school children from 2005 to 2014 in Japan: a retrospective claims database study,” *Journal of Public Health*, in press. 学術論文
- Inoue W, Ikezoe T, Tsuboyama T, Sato I, Malinowska KB, Kawaguchi T, Tabara Y, Nakayama T, Matsuda F, Ichihashi N. 2017. “Are there different factors affecting walking speed and gait cycle variability between men and women in community-dwelling older adults?,” *Aging Clin Exp Res.*, 29(2):215-221, 2017 年 4 月. 学術論文
- Tabara Y, Arai H, Hirao Y, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Kosugi S, Ito Y, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama study group. 2017. “Different inverse association of large high-density lipoprotein subclasses with exacerbation of insulin resistance and incidence of type 2 diabetes: The Nagahama study,” *Diabetes Res Clin Pract*, 127:123-131, 2017 年 5 月. 学術論文
- Nakamura J, Kamiya H, Haneda M, Inagaki N, Tanizawa Y, Araki E, Ueki K, Nakayama T. 2017. “Causes of death in Japanese patients with diabetes based on the results of a survey of 45,708 cases during 2001-2010: Report of the Committee on Causes of Death in Diabetes Mellitus,” *J Diabetes Investig.* 8(3):397-410, 2017 年 5 月. 学術論文
- Matsumoto H, Izuhara Y, Niimi A, Tabara Y, Nagasaki T, Kanemitsu Y, Murase K, Oguma T, Ito I, Muro S, Sekine A, Matsuda F, Kosugi S, Nakayama T, Chin K, Mishima M; Nagahama Study Collaboration Group. 2017. “Risks and Cough-Aggravating Factors in Prolonged Cough.

- Epidemiological Observations from the Nagahama Cohort Study,” *Ann Am Thorac Soc.*, 14(5):698-705, 2017 年 5 月. 学術論文
- Nakayama T, Imanaka Y, Okuno Y, Kato G, Kuroda T, Goto R, Tanaka S, Tamura H, Fukuhara S, Fukuma S, Muto M, Yanagita M, Yamamoto Y; BiDAME: Big Data Analysis of Medical Care for the Elderly in Kyoto. 2017. “Analysis of the evidence-practice gap to facilitate proper medical care for the elderly: investigation, using databases, of utilization measures for National Database of Health Insurance Claims and Specific Health Checkups of Japan (NDB),” *Environ Health Prev Med*, 22(1):51, 2017 年 6 月. 学術論文
- Yamamoto M, Doi H, Yamamoto K, Watanabe K, Sato T, Suka M, Nakayama T, Sugimori H. 2017. “Adaptation of the European Commission-recommended user testing method to patient medication information leaflets in Japan,” *Drug Healthc Patient Saf.*, 14:9:39-63, 2017 年 6 月. 学術論文
- Sasaki H, Yonemoto N, Mori R, Nishida T, Kusuda S, Nakayama T. 2017. “Assessing archetypes of organizational culture based on the competing values framework: the experimental use of the framework in Japanese neonatal intensive care units,” *Int J Qual Health Care*, 29(3):384-391, 2017 年 6 月. 学術論文
- Mo X, Gai Tobe R, Wang L, Liu X, Wu B, Luo H, Nagata C, Mori R, Nakayama T. 2017. “Cost-effectiveness analysis of different types of human papillomavirus vaccination combined with a cervical cancer screening program in mainland China,” *BMC Infect Dis.*, 17(1):502, 2017 年 7 月. 学術論文
- Ukai T, Shikata S, Nakayama T, Takemura YC. 2017. “A comparison of the results of prospective and retrospective cohort studies in the field of digestive surgery,” *Surg Today*, 47(7):789-794, 2017 年 7 月. 学術論文
- Ohura T, Hase K, Nakajima Y, Nakayama T. 2017. “Validity and reliability of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index for stroke patients,” *BMC Med Res Methodol.*, 17(1):131, 2017 年 8 月. 学術論文
- Seta T, Takahashi Y, Noguchi Y, Shikata S, Sakai T, Sakai K, Yamashita Y, Nakayama T. 2017. “Effectiveness of *Helicobacter pylori* eradication in the prevention of primary gastric cancer in healthy asymptomatic people: A systematic review and meta-analysis comparing risk ratio with risk difference,” *PLoS One*, 12(8):e0183321, 2017 年 8 月. 学術論文
- Fujimoto S, Tanaka S, Laakso I, Yamaguchi T, Kon N, Nakayama T, Kondo K, Kitada R. 2017. “The Effect of Dual-Hemisphere Transcranial Direct Current Stimulation Over the Parietal Operculum on Tactile Orientation Discrimination,” *Front Behav Neurosci.* 11:173, 2017 年 9 月. 学術論文
- Ueda K, Ohtera S, Kaso M, Nakayama T. 2017. “Development of quality indicators for low-risk labor care provided by midwives using a RAND-modified Delphi method,” *BMC Pregnancy Childbirth*, 17(1):315, 2017 年 9 月. 学術論文
- Takahashi N, Kuriyama A, Kanazawa H, Takahashi Y, Nakayama T. 2017. “Validity of spectral analysis based on heart rate variability from 1-minute or less ECG recordings,” *Pacing Clin Electrophysiol*, 40(9):1004-1009, 2017 年 9 月. 学術論文
- Tabara Y, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Kosugi S, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama Study Group. 2017. “Prognostic Significance of Spot Urine Na/K for Longitudinal Changes in Blood Pressure

- and Renal Function: The Nagahama Study,” *Am J Hypertens.* 30(9):899-906, 2017 年 9 月. 学術論文
- Kanazawa N, Ueshima K, Tominari S, Nakayama T. 2017. “Underuse of Cardiac Rehabilitation in Workers With Coronary Artery Disease – Claims Database Survey in Japan,” *Circ J.*, 81(10):1424-1431, 2017 年 9 月. 学術論文
- Nishigori T, Okabe H, Tsunoda S, Shinohara H, Obama K, Hosogi H, Hisamori S, Miyazaki K, Nakayama T, Sakai Y. 2017. “Superiority of laparoscopic proximal gastrectomy with hand-sewn esophagogastrostomy over total gastrectomy in improving postoperative body weight loss and quality of life,” *Surg Endosc.*, 31(9):3664-3672, 2017 年 9 月. 学術論文
- Funada S, Kawaguchi T, Terada N, Negoro H, Tabara Y, Kosugi S, Yamada R, Nakayama T, Akamatsu S, Yoshimura K, Matsuda F, Ogawa O; Nagahama Study Group. 2017. “Cross-Sectional Epidemiological Analysis of the Nagahama Study for Correlates of Overactive Bladder: Genetic and Environmental Considerations,” *J Urol.*, pii: S0022-5347(17)77774-9, 2017 年 10 月. 学術論文
- Ito M, Takahashi H, Iino Y, Kojima H, Hashimoto S, Kamide Y, Kudo F, Kobayashi H, Kuroki H, Nakano A, Hidaka H, Takahashi G, Yoshida H, Nakayama T. 2017. “Clinical practice guidelines for the diagnosis and management of otitis media with effusion (OME) in children in Japan, 2015,” *Auris Nasus Larynx.*, 44(5):501-508, 2017 年 10 月. 学術論文
- Takahashi Y, Fujiwara T, Nakayama T, Kawachi I. 2018. “Subjective social status and trajectories of self-rated health status: a comparative analysis of Japan and the United States,” *J Public Health (Oxf)*, 28:1-8, 2017 年 11 月. 学術論文
- Kuriyama A, Urushidani S, Nakayama T. 2017. “Five-level emergency triage systems: variation in assessment of validity,” *Emerg Med J.*, 34(11):703-710, 2017 年 11 月. 学術論文
- Kojima M, Nakayama T, Otani T, Hasegawa M, Kawahito Y, Kaneko Y, Kishimoto M, Hirata S, Seto Y, Endo H, Ito H, Kojima T, Nishida K, Matsushita I, Tsutani K, Igarashi A, Kamatani N, Miyasaka N, Yamanaka H. 2017. “Integrating patients’ perceptions into clinical practice guidelines for the management of rheumatoid arthritis in Japan,” *Mod Rheumatol*, 27(6):924-929, 2017 年 11 月. 学術論文
- Malinowska KB, Ikezoe T, Ichihashi N, Arai H, Murase K, Chin K, Kawaguchi T, Tabara Y, Nakayama T, Matsuda F, Tsuboyama T. 2017. “Self-reported quality of sleep is associated with physical strength among community-dwelling young-old adults,” *Geriatr Gerontol Int.*, 17(11):1808-1813, 2017 年 11 月. 学術論文
- Ota H, Miyazaki K, Nakayama T. 2017. “How Evacuees Obtained Health Care Information After the Great East Japan Earthquake: A Qualitative Interview Study” , *Disaster Med Public Health Prep.*, 11(6):729-734, 2017 年 12 月. 学術論文
- Fujiki S, Ishizaki T, Nakayama T. 2017. “Variations in status of preparation of personal protective equipment for preventing norovirus gastroenteritis in long-term care facilities for the elderly, ” *J Eval Clin Pract.*, 23(6):1203-1210, 2017 年 12 月. 学術論文
- 中山健夫. 2017. 「これから始める！シェアード・ディシジョンメイキング 新しい医療のコミュニケーション」日本医事新報社, 2017 年. 著書

- Kaso M, Miyazaki K, Nakayama T. 2018. “A qualitative study on coping behaviors and influencing factors among mothers in Japan raising children under three years old while experiencing physical and mental subjective symptoms,” *BMC Womens Health*, 18(1):14, 2018 年 1 月. 学術論文
- Okada H, Onda M, Shoji M, Sakane N, Nakagawa Y, Sozu T, Kitajima Y, Tsuyuki RT, Nakayama T. 2018. “Effects of lifestyle advice provided by pharmacists on blood pressure: The COMMunity Pharmacists ASSist for Blood Pressure (COMPASS-BP) randomized trial,” *Biosci Trends*, 11(6):632-639, 2018 年 1 月. 学術論文
- Nakatani Y, Nakayama T, Nishiyama K, Takahashi Y. 2018. “Effect of target temperature management at 32-34° C in cardiac arrest patients considering assessment by regional cerebral oxygen saturation: A multicenter retrospective cohort study,” *Resuscitation*, pii: S0300-9572(18)30073-X, 2018 年 2 月. 学術論文
- Yanagi H, Terashi H, Takahashi Y, Okabe K, Tanaka K, Kimura C, Ohura N, Goto T, Hashimoto I, Noguchi M, Sasayama J, Shimada K, Sugai A, Tanba M, Nakayama T, Tsuboi R, Sugama J, Sanada H. 2018. “The Japanese registry for surgery of ischial pressure ulcers: STANDARDS-I,” *J Wound Care*, 27(3):174-183, 2018 年 3 月. 学術論文
- Tabara Y, Matsumoto T, Murase K, Nagashima S, Hirai T, Kosugi S, Nakayama T, Wakamura T, Chin K, Matsuda F; and the Nagahama study group. 2018. “Seasonal variation in nocturnal home blood pressure fall: the Nagahama study,” *Hypertens Res*. 41(3):198-208, 2018 年 3 月. 学術論文
- Kawashima-Kumagai K, Tabara Y, Yamashiro K, Setoh K, Yoshikawa M, Kawaguchi T, Miyake M, Nakanishi H, Muraoka Y, Takahashi Y, Kosugi S, Nakayama T, Yoshimura N, Matsuda F, Tsujikawa A; Nagahama Study group. 2018. “Association of retinal vessel calibers and longitudinal changes in arterial stiffness: the Nagahama study,” *J Hypertens*, 36(3):587-593, 2018 年 3 月. 学術論文
- Tabara Y, Igase M, Setoh K, Kawaguchi T, Okada Y, Ohara M, Takahashi Y, Kosugi S, Ohyagi Y, Miki T, Nakayama T, Kohara K, Matsuda F; J-SHIPP and Nagahama study groups. 2018. “Clinical significance of an elevated ankle-brachial index differs depending on the amount of appendicular muscle mass: the J-SHIPP and Nagahama studies,” *Hypertens Res*, in press. 学術論文
- Futaki S, Nakase I. 2017. “Cell-surface interactions on arginine-rich cell-penetrating peptides allow for multiplex modes of internalization acc,” *Chem. Res.*, 50(10):2449-2456, 2017 年. 学術論文
- Nakase I, Noguchi K, Aoki A, Takatani-Nakase T, Fujii I, Futaki S. 2017. “Arginine-rich cell-penetrating peptide-modified extracellular vesicles for active macropinocytosis induction and efficient intracellular delivery,” *Sci. Rep.*, 7(1):1991, 2017 年. 学術論文
- Akishiba M, Takeuchi T, Kawaguchi Y, Sakamoto K, Yu HH, Nakase I, Takatani-Nakase T, Madani F, Gräslund A, Futaki S. 2017. “Cytosolic antibody delivery by lipid-sensitive endosomolytic peptide”, *Nat. Chem.*, 9(8):751-761, 2017 年. 学術論文

- Murayama T, Masuda T, Afonin S, Kawano K, Takatani-Nakase T, Ida H, Takahashi Y, Fukuma T, Ulrich AS, Futaki S. 2017. “Loosening of lipid packing promotes oligoarginine entry into cells angew,” Chem. Int. Ed., 129(26):7752-7755, 2017 年. 学術論文
- Imanishi M, Tsuji S, Suda A, Futaki S. 2017. “Detection of N6-methyladenosine based on the methyl-sensitivity of MazF RNA endonuclease,” Chem. Commun., 53(96):12930-12933, 2017 年. 学術論文
- 二木史朗. 2017. 特集「生体機能性ペプチドを応用した次世代ナノメディシンの展開 アルギニンに富む膜透過ペプチドの細胞内移行」, 『生化学』, 89(1): 8-14, 2017 年. 学術論文
- Shinoda K, Tsuji S, Futaki S, Imanishi M. 2018. “Nested PUF proteins: extending target RNA elements for gene regulation,” ChemBioChem, 19(2):171-176, 2018 年. 学術論文
- Becker C. 2017. “Foreword: Back to the Future?,” Japanese Environmental Philosophy (Edited by James McRae and Baird Callicott). ix-xv, 2017 年 4 月. 学術論文
- 中嶋文子, 赤澤千春, 近藤恵, カール・ベッカー. 2017. 「新人看護師の職場適応への過程-5 年目看護師の語りの分析」, 『相山女学園大学看護学研究』, 9: 1-13, 2017 年 4 月. 学術論文
- 沖永隆子, カール・ベッカー. 2017. 「終末期に対する早期支援」, 『こころの未来』, 17: 48, 2017 年 7 月. 総説
- 赤塚京子, カール・ベッカー. 2017. 「出生をめぐる医療と倫理」, 『こころの未来』, 17: 54, 2017 年 7 月. 総説
- 糸島陽子, 植村小夜子, 小野あゆみ, カール・ベッカー. 2017. 「あなたならどうする? エンドオブライフにある人々と家族とのコミュニケーション」, 2017 年 11 月. DVD
- Hiyoshi K, Becker C, Kinoshita A. 2017. “What behavioral and psychological symptoms of dementia affect caregiver burnout?,” Clinical Gerontologist, 16:1-6, 2017 年 11 月. 学術論文
- Miki R, Becker C, Ide K, Kawakami K. 2018. “Timing and Facilitation of Advanced Directives in Japan,” Archives of Gerontology and Geriatrics, submitted. 学術論文
- 宮野公樹. 2017. 「ポスト近代科学技術を問う意味」, 『21 世紀地球社会における科学技術あり方〜近代科学技術の何を持続し何を変えるか、具体的実践は何か〜』公益財団法人国際高等研究所, 31-36, 2017 年 6 月. 寄稿
- 宮野公樹. 2017. 「文部科学省の本分、大学の本分：政策立案現場にある背景思想と一意見」, 『科学技術社会論研究』, 13: 113-121, 2017 年. 学術論文
- 今井晨介, 尾上洋介, 宮野公樹, 日置尋久, 小山田耕二. 2017. 「異分野融合の促進に資する学術分野の文化比較結果の可視化」, 『可視化情報学会論文集』, 37(8): 40-47, 2017 年. 学術論文
- Koyamada K, Onoue Y, Kioka M, Uetsuji T, Baba K. 2018. “Visualization of JOV abstracts,” Journal of Visualization, 21(2): 309-319. 学術論文
- Ebara Y, Hayashida Y, Uetsuji T, Koyamada K. 2017. “Study on category classification of conversation document in psychological counseling with machine learning,” Computational Science/Intelligence and Applied Informatics, 2017: 109-121, 2017 年, 学術論文
- 佐野直. 2018. 「方法としての「ユートピア」ー非理想理論の観点から」, 『社会システム研究』, 21, 印刷中, 学術論文

- Yokoi T, Nakagawa Y, Miyagawa H. 2017. “Quantitative structure-activity relationship of substituted imidazothiadiazoles for their binding against the ecdysone receptor of Sf-9 cells,” Bioorganic & medicinal chemistry letters, 27: 5305-5309, 2017 年. 学術論文
- Sugiura A, Horoiwa S, Aoki T, Takimoto S, Yamagami A, Nakano T, Nakagawa Y, Miyagawa H. 2017. “Discovery of a nonsteroidal brassinolide-like compound, NSBR1,” J. Pesic. Sci., 42:105-111, 2017 年. 学術論文
- 宮川恒. 2017. 「農薬はどう教えられているか」, 『日本農薬学会誌』, 42: 153-158, 2017 年. 寄稿論文
- 宮川恒. 2017. 「農薬はどう教えられているかー教科書に登場する農薬」, 『植物防疫』, 71(9): 571-575 頁, 2017 年. 寄稿論文
- 伊勢田哲治. 2017. 「研究不正とピアレビューの社会認識論」, 『科学技術社会論研究』, 14: 49-62, 2017 年 11 月. 学術論文
- 伊勢田哲治. 2017. 「社会における動物実験研究者の情報発信の役割---よりよい双方向コミュニケーションのために---」, 『実験動物技術』, 52(1): 25-31, 2017 年 6 月. 学術論文
- 神里達博, 北野宏明, 伊勢田哲治. 2017. 「AI によって人類はどのように変化するのか」, 川口淳一郎 監修『AI・ロボット・生命・宇宙… 科学技術のフロンランナーがいま挑戦していること サイエンスとアートのフロンティア』秀和システム, 95-113, 2017 年 10 月. 著書

学会発表など

- 川上浩司. 2017. 「医療リアルワールドデータとライフコースデータ」, 第 44 回日本毒性学会学術年会 (横浜), 2017 年 7 月 12 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2017. 「理想の終焉を考える」, 慢性期医療学会 (インデックス大阪), 2017 年 4 月 22 日. 口頭発表
- Becker C. 2017. “Palliative Care is a Human Right for People Living with Dementia,” ADI 国際アルツハイマー会議 (京都国際会議所), 2017 年 4 月 27 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2017. 「ポスト iPS 医療の時代」, 実存療法学会 (東京), 2017 年 7 月 22 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2017. 「仏教の理念を現場でどう活かせるか」, スピリチュアルケア学会 (京都市, 文教大学), 2017 年 9 月 9 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2017. 「日本人の時間感に見える死のケア」, 死の臨床研究会 (秋田市), 2017 年 10 月 8 日. 口頭発表
- 鳥居寛之, 坪倉正治, 尾上洋介, 宇野賀津子. 2017. 「福島原発事故後の放射線に関する twitter データの解析: 時系列イベントとの関連」, 日本リスク研究学会第 30 回年次大会, 2017 年 10 月. 口頭発表
- Uno K, Tsubokura M, Onoue Y, Fujimiya H, Torii HA. 2018. “Twitter analysis of public response to radiation exposure after the Fukushima Daiichi Nuclear accident,” The Society for Risk Analysis, Asia Conference 2018, 2018 年 3 月. 口頭発表
- Torii HA, Tsubokura M, Onoue Y, Fujimiya H, Uno K. 2018. “Time-line analysis of twitter opinions to broadcasted events concerning radiation risk after Fukushima nuclear accident,” The Society for Risk Analysis, Asia Conference 2018, 2018 年 3 月. 口頭発表

- Ashida Y, Umezawa K, Onoue Y, Koyamada K. 2017. “Development of a visual analytics system for structural equation modeling,” IEEE PacificVis 2017 (Seoul), 2017 年 4 月. ポスター発表
- Onoue Y, Koyamada K. 2017. “Quasi-biclique edge concentration: a visual analytics method for biclustering,” IEEE PacificVis 2017 (Seoul), 2017 年 4 月. 口頭発表
- Ebara Y, Uetsuji T, Kamata M, Koyamada K. 2017. “Study for visualizing the flow of conversation in counseling,” The 14th Asian Symposium on Visualization (Beijing), 2017 年 5 月. 口頭発表
- Onoue Y, Ashida Y, Koyamada K. 2017. “Interactive model building and visualization for structural equation modeling,” The 14th Asian Symposium on Visualization (Beijing), 2017 年 5 月. 口頭発表
- 林田祐磨, 上辻智也, 江原康生, 小山田耕二. 2017. 「機械学習を用いた心理カウンセリングにおける会話データの自動カテゴリ分類に関する研究」, 日本バーチャルリアリティ学会 第 32 回テレマージョン技術研究会, 2017 年 6 月. 口頭発表
- Hayashida Y, Uetsuji T, Ebara Y, Koyamada K. 2017. “Category classification of text data with machine learning technique for visualizing flow of conversation in counseling,” IEEE 2017 NICOGRAPH International (Kyoto), 2017 年 6 月. 口頭発表
- 上辻智也, 鎌田穰, 中島弘徳, 岩谷宏一, 江原康生, 小山田耕二. 2017. 「カウンセリングにおける会話の流れの可視化システムに対するユーザーによる機能評価」, 第 45 回可視化情報シンポジウム(東京), 2017 年 7 月. 口頭発表
- 梅澤浩然, 夏川浩明, 高山順, 尾上洋介, 大浪修一, 小山田耕二. 2017. 「線虫の受精卵内カルシウム波の伝播メカニズム解明に資する可視化」, 第 45 回可視化情報シンポジウム(東京), 2017 年 7 月. 口頭発表
- 高保健太, 尾上洋介, 小波秀雄, 真鍋勇一郎, 小山田耕二, 坂東昌子. 2017. 「科学者への意識調査を通じた低線量放射線の生体影響に関する認知の可視化」, 可視化情報全国講演会(室蘭 2017), 2017 年 11 月. 口頭発表
- 小林沙織, 尾上洋介, 小山田耕二, 坪倉正治, 鳥居寛之, 宇野賀津子. 2017. 「福島第一原発事故後の Twitter におけるインフルエンサーグループの情報拡散状況の可視化」, 可視化情報全国講演会(室蘭 2017), 2017 年 11 月. 口頭発表
- Onoue Y, Koji K. 2017. “Optimal tree reordering for group-in-a-box graph layouts,” ACM SIGGRAPH Asia 2017 Symposium on Visualization (Bangkok), 2017 年 11 月. 口頭発表
- 横井大洋, 中川好秋, 宮川恒. 2017. 「テトラヒドロキノリン型脱皮ホルモンアゴニストの定量的構造活性相関」, 日本農薬学会第 42 回大会(愛媛大学), 2017 年 3 月 7 日. 口頭発表
- 岡部諒太, 北中淳史, 内山博允, 須恵雅之, 宮下正弘, 中川好秋, 宮川恒. 2017. 「ヤエヤマサソリの毒液に含まれる抗菌性ペプチドの構造決定と活性評価」, 日本農薬学会第 42 回大会(愛媛大学), 2017 年 3 月 7 日. 口頭発表
- 林真由, 宮下正弘, 宮川恒. 2017. 「pVEC 関連ペプチドの構造と植物細胞透過性の関係」, 日本農芸化学会 2017 年度大会(京都女子大学), 2017 年 3 月 20 日. 口頭発表
- 杉浦愛理, 幌岩真理, 青木孝憲, 山上あゆみ, 中野雄司, 中川好秋, 宮川恒. 2017. 「ブラシノライド様化合物のための分子設計」, 日本農芸化学会 2017 年度大会(京都女子大学), 2017 年 3 月 18 日. 口頭発表

西野雄人, 宮川恒. 2017. 「塩ストレスがイネのオーキシン代謝に与える影響」, 日本農芸化学会関西・中四国・西日本支部 2017 年度合同大阪大会 (大阪府立大学), 2017 年 9 月 22 日. 口頭発表

講演会、展示会などのアウトリーチ活動

川上浩司. 2017. コメント, NHK 19 時ニュース「子宮頸がんワクチンで痛み 接種後の発症期間にばらつき」, 2017 年 4 月 12 日.

川上浩司. 2017. インタビュー, NHK 福岡ニュース「田川市、学校健診のデータ活用事業参加へ」, 2017 年 4 月 15 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその活用」, 埼玉県市長会 (埼玉), 2017 年 4 月 20 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「医療リアルワールドデータ基盤による新しい臨床研究と医療現場への還元」, 川崎市立病院学術講演会 (川崎), 2017 年 4 月 20 日.

川上浩司. 2017. インタビュー, 「IT を駆使した新・医学の可能性」, 『D to D's Mind 医の道をつなぐ』, 2017 年 5 月 1 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその活用」, 全国青年市長会研修会 (東京), 2017 年 6 月 6 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「臨床研究基盤のための医療データベースの整備」, 全国都市立病院薬局長協議会 (大阪), 2017 年 7 月 7 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「薬剤疫学研究による医療リアルワールドデータの解析とその基盤整備」, PBA 医薬アカデミー (東京), 2017 年 8 月 10 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「医療ビッグデータ基盤の現状と臨床研究への応用」, Retina Deep Dive 研究会 (東京), 2017 年 8 月 19 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「医療、健診データの利活用について」, 大阪府議会議員大阪維新の会派, 2017 年 9 月 5 日.

川上浩司. 2017. 講演, 「生涯を通じた健康づくりについて」, WHO 神戸センターと市民の健康を考えるシンポジウム (神戸), 2017 年 9 月 23 日.

川上浩司. 2017. インタビュー, 読売テレビ ウェークアップ! ぷらす「中国での期限切れワクチンについて」, 2017 年 10 月 14 日.

川上浩司. 2017. 基調講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその利活用」, 第 76 回日本公衆衛生学会総会市民公開シンポジウム (鹿児島), 2017 年 11 月 2 日.

カール・ベッカー. 2017. 出演, NHK ラジオ第 2 放送「日本人の死生観」, 2017 年 4 月 13 日.

カール・ベッカー. 2017. 講演, 「此岸と彼岸」, 古賀市恵病院 (福岡), 2017 年 5 月 14 日.

カール・ベッカー. 2017. 講義, 「超高齢社会を生きる」, 京都大学総合人間学部 (京都), 2017 年 5 月 30 日.

カール・ベッカー. 2017. 講演, 「葬送文化を継承する期待」, フェネラルビジネスフェア (横浜パシフィコ), 2017 年 6 月 25 日.

カール・ベッカー. 2017. 講演, 「愛する者は死なない～東洋の知恵に学ぶ癒し」, (三河教区、愛知県幸田町会館), 2017 年 6 月 27 日.

カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の他界観を臨床に活かす」, JSCWA (大阪太融寺), 2017 年 7 月 14 日.

- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「臨死研究」, 高野山安居会 (高野山大学), 2017 年 7 月 19 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「比叡の光～日本人の死生観」, 仏教文化講座 (比叡山延暦寺会館), 2017 年 7 月 29 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観にふさわしいケア」, 死の臨床研究会 (秋田市), 2017 年 10 月 7 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観と癒し」, 京都芸術大学 (京都), 2017 年 10 月 16 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観～生き方と逝き方」, 放送大学 (京都), 2017 年 10 月 17 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観と仏教」, 花園大学 (京都), 2017 年 10 月 24 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観の行方」, Executive Leadership Program (京都大学思修館), 2017 年 10 月 28 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「日本人の死生観～生き方と逝き方」, こころの未来研究センター (京都大学), 2017 年 11 月 8 日.
- Becker C. 2017. 講演, “Burnout in Health Care,” 香港大学社会科学学院 (香港), 2017 年 12 月 5 日.
- Becker C. 2017. 講演, “ACP Prospects and Challenges,” 香港大学社会科学学院 (香港), 2017 年 12 月 6 日.
- Becker C. 2017. 講演, “Cost-Effective Grief Care,” 香港大学社会科学学院 (香港), 2017 年 12 月 7 日.
- カール・ベッカー. 2017. 講演, 「愛する者の死とどう向き合うか」, 名古屋市立大学 (名古屋市), 2017 年 12 月 16 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「グリーフケアの重要性と危険性」, 上智大学 (大阪キャンパス), 2018 年 1 月 14 日.
- Becker C. 2018. 対談, “Setting Governmental Priorities,” Singapore Skype Conference, 2018 年 1 月 18 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「理想の終末期」, 木津川台公民館 (京都), 2018 年 2 月 16 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「仏教徒の生き方と逝き方を考える」, 本派本願寺 (京都), 2018 年 2 月 17 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「在宅の看取りの重要性と危険」精華町 (京都府) 2018 年 2 月 20 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「自然死～自然な死に方とは」, 京都芸術大学 (京都), 2018 年 2 月 23 日.
- Becker C. 2018. 講演, “Burnout in Health Care,” グアム大学看護学部 (グアム), 2018 年 3 月 9 日.
- Becker C. 2018. 講演, “Sustainable Wisdom in Asian Lifestyles,” グアム大学人文社会学部 (グアム), 2018 年 3 月 10 日.
- 宮野公樹. 2017. 基調講演, 「イノベーションと言葉」, Innovation Guide vol.1 – イノベーションを生み出す共創のデザイン (主催: ロフトワーク), 2017 年 8 月 2 日.
- 宮野公樹. 2017. 「研究テーマはどうやって決めるのか? 変えるのか?」, 第 6 回結晶工学未来塾講演 (主催: 公益社団法人応用物理学会結晶工学分科会), 2017 年 11 月 2 日. 講演

- 宮野公樹. 2017. 出演, academist Live #8「学問論の追求とその実践 - 今、学術界の何が問題か?」, 2017 年 12 月 28 日.
- 宮野公樹. 2018. インタビュー, 「学問論とは何か - 京大・宮野公樹准教授にその理念と実践を聞く」, アカデミストジャーナル, 2018 年 1 月 10 日.
- 宮野公樹. 2018. 主催, 「全分野結集型シンポジウム「学問の世界」-真理探究とは何か?-, 2018 年 2 月 22 日.
- 宮野公樹. 2018. インタビュー, 「異分野融合とは何か?」, 「研究支援 (発行: 株式会社リバネス)」, 2018 年 3 月 7 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “Does visualization contribute to scientific discovery?,” 2017 Big Data Visualization Summit Forum-Chengdu (China), 2017 年 5 月 6 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “Visual Causality Exploration and its Applications,” The 1-st China-Japan Joint Visualization Workshop (China), 2017 年 7 月 24 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “データ駆動型解析による多細胞生物の発生メカニズムの解明, Big Data Application Symposium, 2017 年 9 月 16 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “Visual Causality Exploration and its Applications,” JSST2017, 2017 年 10 月 25 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “Particle modeling for fluid simulation and visualization,” Future Mind-International Symposium (England), 2017 年 11 月 18 日.
- Koyamada K. 2017. 招待講演, “Scientific Visualization in open data era,” the 12th annual Scientific and Technological Conference (Kenya), 2017 年 11 月 23 日.
- 小山田耕二. 2017. 招待講演, 「基礎生命科学におけるグラフ可視化」, 核融合研究所/先進的描画装置を用いた可視化情報の研究会, 2017 年 12 月 21 日.
- 宮川恒. 2017. 講師, 「知っているようで知らない、農薬の話」, 農薬ゼミ (アリストンホテル神戸), 2017 年 10 月 21 日.
- 宮川恒. 2017. 講演, 「農薬はどう教えられているか」, 第 25 回農薬レギュラトリーサイエンス研究会 (さいたま市民会館おおみや), 2017 年 11 月 21 日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2017

2018年6月15日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp

